

嗜虐の艦隊
壱



DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

嗜虐の艦隊(壱)

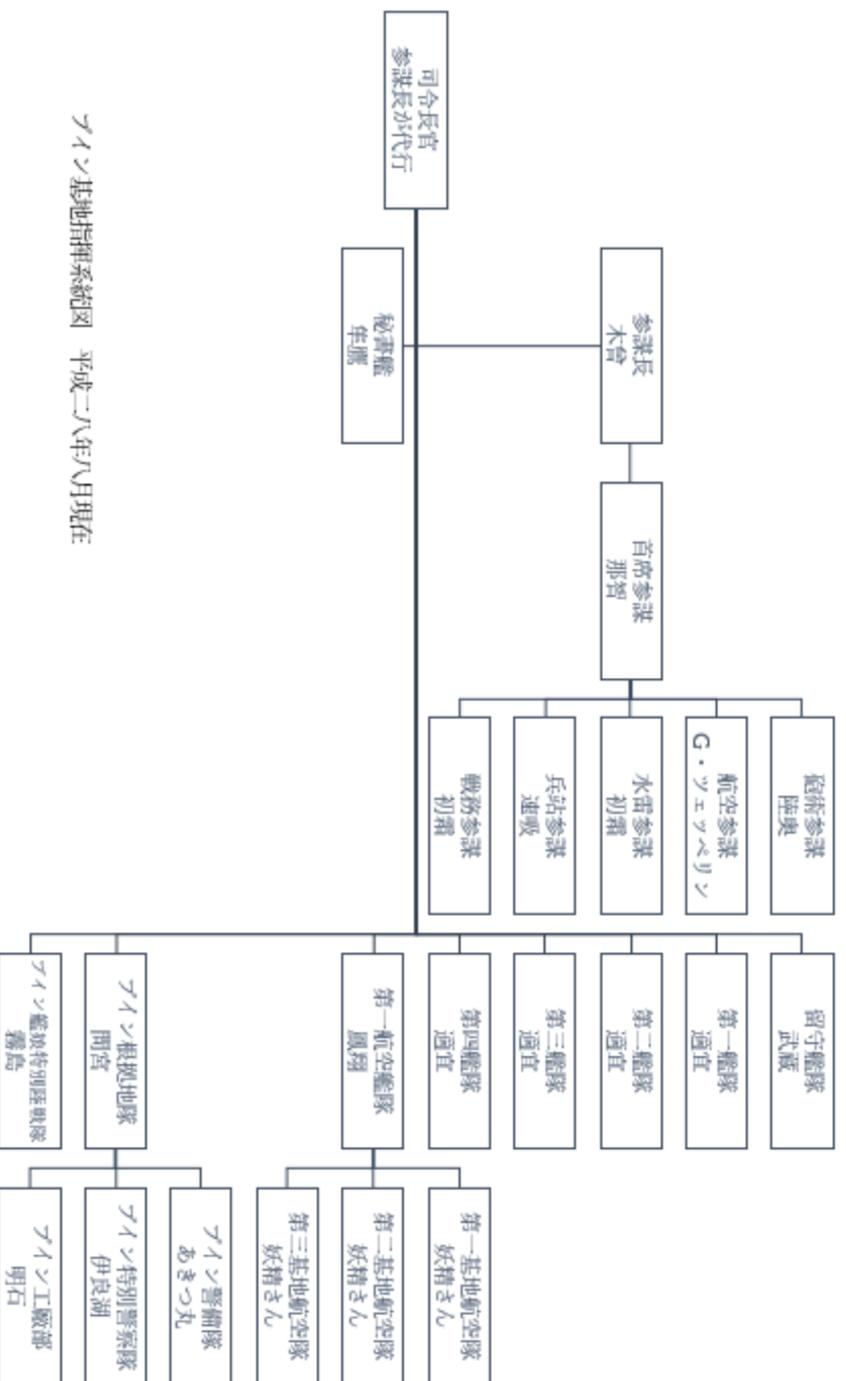
桐嶋誠一郎



伏龍齋

私と関わり、豊かな刺激と閃きを与えてくれた全ての人に。
また、創作の機会を与えてくださった「艦これ」運営鎮守府、
素晴らしい絵で作品に命を吹き込んでくださった高鰻先生、
消えかけていた私の創作の火を再び灯してくれた久永先生、
そして、いつも新たなインスピレーションを与えてくれるMに。





アイソン基地指揮系統図 平成二八年八月現在

第一話 戦艦霧島は淫欲を秘める

「はあっ、はあっ、はあっ…！」

夜も更けた頃。とあるマンションの一室に、激しい呼吸音と、淫猥な水音が響いていた。

「ああっ、ちんぼ、ちんぼっ…♥ ちんぼ欲しい、ちんぼ欲しいっ、ちんぼ、ちんぼおっ…♥」

熱い吐息とともに卑猥な言葉を吐き出す女は、ベッドの上にいる。ショートの切りそろえた髪を振り乱し、全裸で悶える彼女は、誰だろう、艦娘霧島である。こんな時でも、眼鏡を外さない彼女は、しかし、なければ何も見えないほど近眼という訳ではない。この方が興奮するのだ。全裸だが首から上だけが普段通り、というのが、まるで路上で拉致され、適当な部屋に押し込められて服を剥がれ、無茶苦茶に強姦されているかのように感じられる。頭部の電探艙装だけを外し、枕元に放り投げている。

「ちんぼ、ちんぼっ、ちんぼおっ…♥ ちんぼ、ちんぼ、ちんぼ、ちんぼおっ…♥」

彼女が自慰を始めてから、既にそれなりの時間が経過している。それゆえ彼女の意識はかなり昂っており、もう、まともな台詞を吐く事すら容易ではない。自らが渴望するその名を、何度も何度も繰り返し呼ぶばかりである。だが、それでいいのだ。卑猥なその名を口にする度、淫猥な言葉を口にする自分を認識する。そして、自らがいかに卑しく、淫らで、最低の存在であるかを思い知り、余計に昂っていくのだ。

「ああ、ちんぼ欲しいっ、ちんぼ欲しい、ちんぼ欲しいっ…♥ 犯して、誰か犯して、ちんぼ、誰かちんぼちょうだいっ、ちんぼ、ちんぼおっ…♥」

両手で秘部を弄っていたかと思えば、右手はそのままに、左手を自らの豊かな胸にやり、乱暴に揉みしだく。優しく、ではない。激しく、ぐにゃぐにゃと変形させるのだ。まるで、女の扱い方もわからない童貞が、安い金で買った商売女を扱うように。彼女は、そういう扱い方をされると興奮するのである。だから、痛くていい。むしろ、痛い方がいい。乱暴に使われたい。人間扱いされなくていい。人間扱いなんか、されたくない。便器でいい。肉便器でいい。肉ダッチで、いい。

「だめ、我慢できない…もう、だめっ…!♥ んじゆる…♥ じゆる、ち

ゆ、じゆる、ちゅうっ…♥」

自ら言った通り我慢できなくなった霧島は、ベッドサイドチェストに置かれていたパイプを手にとった。男性器を模した形状のそれを、迷う事なく咥え込むと、下品な音を立てながらしゃぶり始める。もちろん、わざと音を立てているのだ。その音がまた、彼女を昂らせる。

それに彼女は、口に男性器を迎え入れるというプレイが、どんな性行為よりも好きだった。肉便器として、肉オナホとして扱われる事を望む彼女にとってみれば、これこそが、自分を最もオナホに近付けられる行為なのだ。オナホがちんぽを突っ込まれている時、気持ちいいと感じるだろうか？ そんな筈はない。オナホはただのシリコンだ。男性器を受け入れて、気持ちよく感じる訳がない。ならば、女にとっては疲れるだけ、苦しいだけの口淫こそ、彼女の望みに一番近いのだ。

「んぐうっ…♥ んむっ…♥ ぐうっ…♥ んうっ…♥」

だから、彼女が口淫を始めると、すぐにこうなる。自らの手でパイプを喉の奥まで突き入れてしまう。パイプの龟头を模した部分が食道まで入り込んで、気道を塞いでしまうまで、ねじ込むのだ。強烈な嘔吐感に襲われてえずいてしまうし、目からは涙がこぼれるし、何より、気道を塞がれた事で呼吸もできなくなる。

彼女にとっては、それが最高の快樂なのだ。自分が便器になっていると、自覚できる。喉をオナホとして使われていると感じられる。苦しく、もっと苦しく、と、彼女は苦悶を望む。使われたい、と。道具として…ちんぽに使われるただの道具として一生を終えたいと、心の底から願う。

「ぐう…♥ んぐうっ…♥ んんうっ…♥ ん、ぐ…♥」

食道までねじ込んだパイプをゆっくり上下させ、自らの食道を文字通りオナホールにする霧島。彼女は、このパイプの味が嫌いだった。今も、本物の男性器ならば裏筋にあたる部分に舌が当たっているが、とても不味い。シリコンの塊に過ぎないから当然なのだが、非常に不味い。

だが今は、不味いからこそ興奮する。

彼女に、本当にちんぽを咥えた経験はない。そもそも処女だ。パイプで秘部を買った事はあるが、実物は見た事もない。だから、本物の味も判らない。全ては想像、妄想。ちんぽを突っ込まれて便器として使われるというのも、彼女の夢でしかなく、妄想でしかない。だが、おそらく本物のちんぽも、美味しくはないだろうと思っている。常識的に考えて、性器が美味な訳はない。

だからこそ、この不味い偽ちんぽが、彼女の好物なのだ。不味い肉棒を口に突っ込まれて苦しむ。それこそ、彼女の思い描く『道具』の姿なのである。

「ぐぶう…♥ んぐ…♥ ぐ…♥ ぐう…♥」

徐々に、酸素がなくなってくる。いくら彼女が艦娘で、通常の間人とは比較にならない肺活量を誇るとは言っても、呼吸せず生きていける訳ではない。今自分に対してしているように、気道を塞いで食道をオナホにしていれば、やがては窒息し、死んでしまうだろう。だが彼女にとっては、それすら快感であり、ご褒美だ。

ちんぽに奉仕しながら死ぬ。そんな事を考えるだけで、秘部から分泌される淫液はその量を増す。酸欠で朦朧とした意識の中、右手でぐちゃぐちゃと秘部を弄る。卑猥な水音が部屋中に響き、それは彼女の耳にも入る。そうなると、彼女は、自分がいかに淫らな存在か自覚する。

「むぐう…♥ んぐ…♥ ぐう…♥ んぐっ…♥」

先程の、ちんぽ連呼の時と同じだ。

朦朧とした意識の中、彼女は望む。もっとこの音を聞きたい。自らの下の口が立てる歓喜の声を、もっと聞きたい。ちんぽに見立てたシリコンの塊を、自分から喉の奥まで突っ込んで、ちんぽに道具として使われる事を想像して…窒息しながら股を濡らす。そんな最低の屑が、肉でできたダッチワイフこそが自分なのだ、霧島という名の存在なのだと、もっともっと自覚したい。

だから彼女は、もっと激しく秘部を弄る。いや、搔き回す。陰内に指を入れて暴れさせると、よく音が鳴る。それにある程度満足すると、今度は指を抜いて、クリトリスをつまむ。充血し、ぶっくりといやらしく勃起したそれは、皮を剥くまでもなく簡単につまむ事ができた。

「んう…♥ んんっ…♥ んうっ…♥ んん…♥」

つまんだクリトリスを、軽く引っ張ったり、左右に捻ったりしていじめる。それだけで、たまらなく気持ちいい。当然と言えば当然である。ここには神経が集中しているのだ。彼女のこの弄り方ですら充分に乱暴で、痛く感じてしまう事もありえる。そんな、敏感で繊細な部位なのである。

だが、酸欠でばやけた彼女からは、そういう判断力や知識が剥がれ落ちようとしていた。

彼女は思う。クリを弄ると、とても気持ちいい。こうやって軽く刺激しているだけでも、とても気持ちいい。もっと気持ちよくなりたい。どうすれば気持ちよくなれる？ そうだ、もっと強く刺激してやればいい。例えば…例えば、

第二話　そして彼女は肉便器に堕ちた

深海棲艦との戦いが始まってから、もう何年にもなる。艦娘が登場してからに限定しても、既に三年が経過している。とは言え、艦娘の活躍により、国内は平穏を取り戻してはいた。国民は、まるでもう戦争は終わったかのように、平和に暮らしている。国家非常事態宣言も物資の配給も、遠い昔の話だと言わんばかりだ。

そういう気の緩みは、今次戦争の主役たる海軍においてはまったく見られない…という訳ではない。かつて海上自衛隊と呼ばれたその組織は、戦況が安定期に入った事、そして、結局は前線の艦娘に戦ってもらえないという事実から、どこかたるんだ雰囲気や漂わせている部分もあった。

「はあ…」

国防省庁舎A棟にある、海軍軍令部一かつて、海上幕僚監部と呼ばれた組織一の廊下を歩きながら、霧島は思い切り溜息を吐いていた。ある意味その姿が、日本全体に瀰漫する「まるで戦争はとっくに終わったかのような空気」を象徴しているようであった。

彼女の服装は金剛型艦娘としての制服である和服ではなく、白衣の第二種軍装である。艦娘が登場して既に三年。艦娘が前線勤務を外れ、内勤となる事も、そこまで珍しい話ではなくなっていた。実際、霧島も、現在はこの軍令部第二部に勤めている。そんな彼女は、しかし、心なしか肩を落とし、足取りは重い。幸い、誰にも見られる事はなかった。いや、誰もいないからこそ、そんな様子だったのかもしれない。

「あんな調子じゃダメですよ…もう…」

ちょうど出勤してきたところの彼女の頭の中にあっただのは、仕事の事ではなく…つまり戦争の事ではなく、昨日の夜の激しい自慰の事であった。いい加減不味いという自覚はある。あるのだが、やめられない。やめられないから、朝起きてシーツを洗濯機に突っ込んでから、家を出る羽目になるのである。

自分が異常なのは自覚している。明らかに性欲が旺盛過ぎるし、その上、性的嗜好があらゆるさまにねじ曲がっている。自分以外の『霧島』に会った事はないが、皆が皆こんなのではないだろう。おそらく、自分だけがおかしいのだ。さりとて、精神科の軍医のもとを訪れる気にも、なれなかった。

「…ま、仕事しましょ、仕事」

自らの仕事場の前で頬を軽く叩いた霧島は、ドアを開け、中に入っていった。

元々彼女は、大湊警備府で建造された。建造当初から実戦にはあまり出ず、ほぼ参謀業務を行っていた。WW2における欧州戦史、特に独ソ戦の研究を趣味としている。平成二六年夏のAL/MI作戦時、深海棲艦の本土攻撃部隊の一部が本土警戒線を突破、東北に着上陸を開始した際は、その趣味が役立った。彼女は、艦娘による特別陸戦隊の臨時編成と指揮を担当。敵部隊を迎撃、制圧し、その功績から個人感状を受けている。

その後は、大湊警備府にて、上陸してきた深海棲艦の撃退に関する作戦計画の研究を行っていた。軍令部に提出されたその研究が上層部の目に留まった事もあり、二七年の夏に軍令部第二部に転出…つまり、今の職場に収まった訳である。その役職は、艦娘陸戦隊総監。艦娘によって構成される陸戦隊の、編成・訓練・戦術研究・技術研究の最高責任者である。

部下は二人いたがどちらも艦娘で、横須賀鎮守府出身の鳥海と、ショートランド泊地出身の大淀。有能な部下に助けられ、艦娘陸戦隊の整備は進んでいる。

霧島は、仕事が好きだった。仕事に没頭している時は、身体が疼く事はないからである。自己破滅願望を自覚するほどまでにねじ曲がった性癖が、墮落を求めて彼女の身体を蝕む事は、仕事中には起きないのだ。だから、家に帰っても仕事している事がよくある。それでも、寝る直前になれば、昂って昨夜のようになってしまうのである。工作中、その事に思い至って思わず顔を赤くしてしまい、ぶるぶると頭を振った。まわりつくねばついた思考を、振り払おうとしたのである。鳥海に怪訝な顔をされたが、何を考えていたかは気付かれずに済んだようだ。

来客を大淀に告げられたのは、午後三時を回った頃だった。一週間ほど前から、ブイン基地の参謀長が来るという話は聞いていた。そのため驚きはなかった。なかったが、最前線鎮守府の参謀長が、艦娘陸戦隊の軍備担当に何の用だろうというのは、気になっていた。それも、話してみれば判る事である。二人の部下に後を任せると、霧島はその来客が待つ応接室に向かった。

軍令部にも、小さいものの応接室がある。霧島は、その応接室の扉をまずはノックし、扉を開けて中に入ったところで驚いた。

「ふふ…どーした、鳩が豆鉄砲食らったみてーな顔して、よ」

霧島と同じ白衣の二種軍装に身を包み、少将の階級章をつけた女は、しかし、艦娘であった。重雷装巡洋艦、木曾である。本来巡洋艦の艦娘は大佐であり、そして艦娘が昇進する事は滅多にない。しかしそれは、逆説的に、この木曾が歴戦の勇士である事を物語っていた。彼女は悪戯っぽい声で言いながら、楽しそうに笑っている。

「あ、い、いえ、すいません。ブイン基地参謀長といいますから、てっきり普通の、その…」

「まあ、艦娘の参謀長は珍しいとは思うがな。来客の履歴ぐらい見ておけよ、軍令部なら見れるだろう？」

確かに木曾の言う通りである。最近特に身体の疼きが酷く、とにかく仕事に没頭したかったため、来客の詳細について調べるような真似はしていなかった。だが、木曾は気にした様子もなく、楽しそうに笑ったまま、応接室の長椅子に腰を下ろす。ほっと胸をなでおろした霧島もまた、それに倣って椅子に座った。ちょうど、木曾とは机を挟んで向かい合う形である。

「それで、私に何か御用で…？」

「ああ、もちろん。だから来たんだ。まあ…なんだ。要は、引き抜きに来たのさ」

引き抜き、という言葉聞いて、思わず首をかしげてしまう。自慢ではないが、霧島に実戦経験はあまりない。参謀業務が主だったためだ。そのため、練度もさして高くはない。高火力高速戦艦を求めるなら、わざわざ内地まで参謀長直々に来なくとも、ブインで建造して鍛えた方が早いだろう。

「意味が分からん、って顔だな。ブインじゃ、今度、司令部要員の大幅入れ替えを考えてるんだ。それで、是非、参謀、もしくは陸戦隊指揮官としてウチに来てほしいって思ってる訳さ」

「…あ、なるほど」

そういう事ならば、霧島にも話は分かった。木曾は、艦娘としての霧島ではなく、頭脳としての霧島を求めているのだ。

「この間から、陸上型の深海棲艦を多数、確認している。ブイン基地としては、独自に陸戦隊を編成して、備えをしたいと考えてるんだ。だから、こうしてわざわざ出向いてきた、って訳さ。一応、上に話は通してある。後は霧島がうんと言うかどうかさ」

ふむ、と霧島は顎に手を当てる。実際のところ、軍令部での仕事は八割方出来上がっている。今彼女がいなくなっても、鳥海と大淀が仕事を完成させてく

れるのは間違いなかった。前線鎮守府の参謀への転属も、栄転とは言えないが、さりとて左遷とも言えない。素直に頷く理由はなかったが、さりとて、無理に断る理由もなかった。

「ま、いきなり言われても、悩むよな。けど俺は、是非ともお前を迎え入れたい。それにな、俺んとこの鎮守府は、工廠がいいものを開発したんだ。それがあれば、きっとお前の力になれると思うのさ」

そう言って木曾は立ち上がると、霧島の傍に寄ってくる。そして、彼女の右手首を掴んだ。

「…？ あの、木曾、さん…？」

「ふふ…口では説明しづらいんでな。百聞は一見に如かず、って言うだろ？」

そう言って、木曾は霧島の手を持ち上げる。何が起こるか判らないにしても、少なくとも危険な事ではなかろうという意識が霧島の方にはあり、それゆえに抵抗はしない。しかし、木曾の手の動きは妙である。このまま木曾が手を動かせば、霧島の手ひらは、木曾の股間に当たる。セクハラか？ もしそうなら、レズなのか？ しかし、木曾は工廠でいいものを開発したと言っていた。何かしらの秘密兵器を、ズボンの下に隠しているのか？ ズボンの下に隠せるほど小型の砲でも、開発したのだろうか？ 霧島が混乱する中、彼女の手は木曾に導かれ—

…ふにやり。

「…えっ？」

木曾の股間に手のひらが当たる。木曾は艦娘であり、人間の性別で言えば女であるから、ズボンの下には何もない筈である。せいぜい、下着と、女性器があるだけの筈だ。しかし、木曾の股間に当たった手から返ってきた感覚は、ひどく柔らかかった。ふにやふにやしていた。混乱して、思わず間の抜けた声をあげてしまった。

これは何だろうか？ 本気で気になってきてしまった。少し手に力を入れて、その柔らかいものを掴む…とまではいかなくとも、手で挟むようにしてみる。確かに、柔らかい。ふにふにしている。艦装の類ではなさそうだ。だが、その一方で、C4のようなプラスチック爆薬の類でもなさそうだった。あれも粘土状で柔らかいものだが、これよりは硬い。

「んー…♪ ふふ、どーした？ 気に入ってくれたか？」

既に木曾は、混乱する霧島から手を離している。霧島が彼女の股間を揉むよ

うにすると、気持ちよさそうに目を細めた。傍から見ると、霧島が木曾の股間に手を当てて揉むという、完全にセクハラの光景である。だが霧島は、そんな事を気にしてはいなかった。むしろ、木曾の股間に揉むものがあるという事実から、これが何なのか、真剣に考えていた。

しばらくそうしていると、木曾のズボンの下にあるものに、変化が現れた。僅かだが、熱く、大きく、そして硬くなったように感じられたのである。その時点でようやく、霧島はある可能性に思い至った。人間の股間にぶら下がっているもので、基本的には柔らかく、刺激すれば大きく、硬くなるもの。それは一つしかない。

「これ…もしかして…っ！♥」

木曾の股間についているもの、今霧島がズボンの布越しに手に握っているもの。それは、男性器であると考えerしかなかった。そう気付いた瞬間、霧島の今までの思考は、いっぺんに吹き飛んでしまった。

普通なら、顔を真っ赤にして手を放し、悲鳴をあげるところである。だが、霧島はそうはしなかった。顔を真っ赤にするところまでは同じだが、手はそのまま、悲鳴もあげない。代わりに、木曾の股間を凝視したまま、固まっている。鼓動が早まっているのが、自分でも判った。あまりの事に、心臓が早鐘を打つ音が、バクバクと頭にまで響いてくる。

「ふふっ…♥ 判ったみたいだな…♥」

その声にはっとして上を向けば、にたあ…♥ と口角を吊り上げた木曾がこちらを見ていた。嗜虐の喜びに満ちた瞳に射抜かれ、霧島はいよいよ、動けなくなる。普通に考えれば、動くべきなのだ。ドアを開けて応接室から逃げ出し、然るべき場所に報告すべきなのだ。しかし彼女には、そんな発想は出てこなかった。

彼女は間違いなく、期待していた。このまま木曾がズボンを下ろす事を。勃起した卑猥な男性器を露わにする事を。その男性器で、レイプ『してくれる』事を。そう、霧島は、期待していたのだ。彼女の脳裏にあったのは、セクハラされた事への嫌悪感でも、まして性犯罪者を前にしての恐怖感でもなかった。妄想の中で何度と『して貰って』きた、強姦という行為が現実と化す事、その期待でしかなかったのである。

それを意識してしまうと同時に、霧島は、自らの下腹部が熱を持つのを自覚した。その熱は、じんわりと、子宮から秘部へ伝わっていく。ここまで来てしまっはもう、自分を誤魔化す事はできない。そうだ。私は喜んでいるのだ。

ちんぽを前にして、喜んでるのだ。はしたなく股を濡らして、自らを性処理用のオナホとして使われるのを、今か今かと待ち望んでいるのだ。

だが、それでも、この場で即座に木曾の方から身体を離してくれたのなら、霧島は冷静な自分を取り戻す事ができただろう。職場と自宅で冷静に考え直し、こんな危険な人物とは二度と関わるまいと思っただろう。

「くふふ…♥」

だが、そうはならなかった。木曾が代わりにしたのは、両手で霧島の頭のアンテナを取っ手のように掴んで、ぐいと、思い切り引き寄せる事だった。霧島はそうされる直前、無意識の内に右手を木曾の股間から離していた。おそらく、本能的に何をされるのか悟っていたのだろう。結果、彼女の顔は直接、木曾の股間に押し付けられた。

そうされて霧島が何をしたかと言えば、それは、鼻を鳴らして臭いを嗅ぐ事だった。まるで犬のように、くんくと、ちんぽの臭いを求めて鼻を鳴らしているのである。木曾に命じられた訳でもないのに、霧島は、そうしてしまっていた。ズボン越しであっても、こうしていれば、布の向こうの香りは漂ってくる。

木曾の股間から漂うのは、オスの臭いだった。霧島が夜な夜な想像し、夢にまで見るほど望んだ、オスの臭いである。気付けば、既に、木曾はアンテナから手を離している。だが、霧島は顔を引く事はない。むしろ、自ら木曾の股間に自らの顔を押し付けている。ぐりぐりと鼻で木曾のちんぽを刺激しながら、胸いっぱい息を吸い込んで、かぐわしいオスの香りを堪能している。

「はあ、はあ、はあっ、はあっ…！♥」

徐々に呼吸が荒くなっていくのを、自分でも感じる。明らかに彼女は発情していた。盛りのついた雌犬のように。

彼女の中のどこかが、当然の事だ、と冷たく呟いていた。実際、それはその通りであった。艦娘として生まれてまだ三年も経ってはいないが、しかし、生まれてこの方ずっと、彼女は犯される事を望んでいたのだ。組み敷かれて、乱暴されて、ただの肉便器にされてしまう事を、ずっと。

そうだ、自分は便器だ。小便器だ。男性器から出る排泄物を受け止めるための、小便器なのだ。小便器が男性器を愛おしいと思うのは、当然の事だろう。自らの役割を果たさせてくれる、いわば、主人なのだから。無意識の内に顔を股間に押し付け、臭いを嗅ぎ、椅子から腰を浮かせていやらしく尻を振り、秘部を淫液で濡らしてしまうのも、仕方のない事なのだ。

木曾はと言えば、そんな卑しい雌豚を見ながら、くつくつと喉を鳴らして笑っている。その表情は、嗜虐の喜びに満ちた笑顔である。霧島が、自らの見立て通りの雌豚であった事実、満足を感じているようだった。

霧島は、今か今かと待っていた。木曾が、自らを犯してくれるのを…いや、『使って』くれるのを、心待ちにしていた。それこそ、一日千秋どころか、一秒万秋の思いで待ち焦がれていた。口にこそ出さないが、早く、早く、心の中では思っていた。

「さーて、と。それじゃ、来週また来るから。それまでに返事、決めておいてくれよ」

ところが、その願いは現実にはならなかった。木曾は身体を引くと、そう言って霧島に背を向けたのである。霧島は呆気にとられ、次いで、「あっ…」と、声にならない声を発した。椅子から転げ落ちるように床に倒れ、続いて四つん這いになって、助けを乞うかのように、木曾の背中に向けて手を伸ばす。

だが、木曾にはまるで、その光景が見えていないかのようだった。ドアノブに手をかけて一度振り向いたのだが、しかし、霧島の様子には一切興味を示さない。

「じゃあ、またな」

気軽に…本当に気軽に、まるで友人に別れを告げるように言うと、木曾は部屋から出ていった。後に残されたのは、霧島だけである。生まれて初めて、ちゃんぽの、雄の臭いを嗅がされ、発情し、雌豚として完全に目覚めてしまいがら、何もされずに置き捨てられた。そんな哀れな霧島ただ一人が、応接室に残されたのだった。

それからの数日は、地獄だった。

木曾は現れなかったし、霧島も、自分の方から連絡をとる事はできなかった。これは、物理的に不可能という意味ではない。仮にも霧島は、軍令部の艦娘陸戦隊総監である。やろうと思えば、木曾の連絡先を知る事など、簡単な話である。

だが、彼女にはできなかった。仮に木曾の連絡先を知れたとしても、自分から連絡を取る事などできなかったろう。それができるような女であれば、そもそも、処女などどっくの昔に捨てている。生まれ故郷の大湊か、それか今の職場である軍令部で働く者をひっかけて、性欲を発散していた筈だ。それができないような女だから、処女のまま、夜な夜な変態的なオナニーに耽っていたの

である。

その彼女が、肉便器として、雌豚として、完全に覚醒させられてしまった。にも関わらず、相手はいない。彼女を組み敷いてくれる人間も、彼女の欲求不満な穴を貫いてくれるちんぼも、ない。

彼女にできることは、いつものように、激しいオナニーに耽る事だけだった。バイブを秘部とアナルそれぞれに挿した上で、三本目のバイブを喉の奥まで咥え込む。それでも、彼女の情欲が解消される事はなかった。むしろ、もっとももっとと求める内に、バイブで気道を塞ぐ時間が長くなり過ぎて、窒息して気絶してしまった。艦娘でなければ、死んでいただろう。

だがしかし、そんな命の危険に晒されても、霧島の心が平常に戻る事はなかった。仕事中ですら、常時発情していた。今までは、仕事に打ち込んでいれば性欲は抑えられていたのに、そんな事はなくなった。仕事中でも、ちんぼの事しか考えられなくなってしまったのだ。

書類を前にしていようが、ディスプレイを前にしていようが、頭の中に浮かぶのは、あの時嗅いだ生ちんぼの香りだった。あれを、布越しではなく直接嗅いでみたい、生で見てみたい、咥えてみたい、そのまま喉を犯してほしい…そんな事ばかり考えている内に、秘部はドロドロになり、下着は用を成さないほどぐちゅぐちゅに濡れた。臭いでバレルのを阻止するために、出勤前には香水を多めにつけた。鳥海と大淀には、顔が赤いと心配された。純粋で上司思いな二人に、感謝した。

だが、心のどこかで、いっそ二人に看破されて、そのまま二人の玩具になりたいと思っている霧島がいるのも、事実だった。二人は純粋な女である筈だが、もう、それでも構わない。二人の共用のレズ玩具にしてほしい。そう思うと、また情欲が燃え上がり、ベッドの上で朝まで盛ってしまった。二人の性的嗜好がどうなのかという点は、綺麗に頭から抜けてしまっていた。

三日目には、もう限界だった。あまりに顔色が悪いからと、鳥海と大淀に早退を勧められた。欲求不満で発狂寸前だったのは事実だったし、このままだと、二人に向かって何をしてしまうか、判らなかった。もしこの日、定時まで仕事をしていたら、夕方には「もう我慢しきれないから、犯してほしい」と言っていて、その場で服を脱いでしまったのではないかと、自分でも思ってしまう。

そんなざまだから、帰り道でも、道行く男の股間を目で追っていた。そんな中、もし自分が、通勤のために満員電車や満員バスに乗る必要があったら…と

夢想した。もしそうだったら、近くの男に自分から胸を押し付け、股間をまさぐるような真似をしていたかもしれない。

「もう、無理…助けて…誰か、助けて…」

二種軍装を乱雑に脱ぎ捨て、下着もぞんざいに投げ捨てて、全裸の霧島はベッドの上にいた。息遣いは荒く、発情しているのは間違いないが、しかし、股間に手をやって自慰する事はない。それで解決するような疼きでないというのは、もう、この三日間で嫌というほどに思い知らされたのだ。

この疼きを解決できるものが何かというのは、判っている。判っているが、自分からは手が出せない…発狂しない限りは。もう霧島は、狂う一步手前だった。発狂して、全裸で路上に飛び出すのも時間の問題ではないかと、本気で考えていた。

「…？」

その時だった。びんぼーん、と、呼び鈴が鳴ったのである。荷物を頼んだ覚えはない。自宅を訪ねてくるような友人もない筈だ。となればセールスか何かだろうか？ ここに住んでから今まで、一度も来た事はないが…

何にせよ、セールスに対応するために起き上がり、玄関まで行く気にはならなかった。もし行ったら行っただ、そのセールスを部屋に連れ込んでしまいそうな気もした。なら、放置するに限る。

ややしばらく横になって居留守を決め込んでいると、玄関から、ガチャガチャと音が鳴った。それが何の音か、情欲に朦朧とした頭では最初、判らなかった。それでも、程なくして、それは鍵穴に鍵を差し込み解錠している音だと判った。

一体誰が？ いつの間にか合鍵を作っていた泥棒か？

その可能性に思い至った時、霧島は、それもいいかな、と思ってしまっていた。もし泥棒なら、そのまま強盗強姦してくれるかもしれない。そうしたら、この疼きが鎮まるかもしれない。だったら、無力な娘を装う事にしよう。後で問題になるかもしれないが、なに、国を守るための軍艦が国民を傷つける訳にはいかなかった、だから無抵抗を貫く事にした、とか言い訳すればいいだろう。

そんな事を考えながら、彼女は侵入者がベッドのもとまで来るのを待っていた。入口に背を向けて、もう、逃げようもないぐらい近付かれるまで待っていた。そして、侵入者がベッドの傍まで来た時寝返りを打って—

「よっ♪」

—そこにいたのは、木曾だった。愉快そうな笑顔を浮かべて、軽く挨拶するのは、まぎれもなく木曾だった。応接室で会った時と違い、艦娘としての制服を、あのセーラー服を着ている。が、それは紛れもなく、あの木曾だった。

「木曾、さん…」

霧島の瞳から、涙がこぼれた。冷静に考えれば、今木曾がしている事は、他人の住まいの合鍵を勝手に作り、それを使って他人の家に勝手に侵入しているという、あからさまな不法行為である。だが、霧島の瞳から流れた涙は、恐怖から出たものでも、怒りから出たものでもない。それは、歓喜の涙だった。

ベッドの傍で立ち止まった木曾に、今度は自分から近付こうと、霧島が動き始める。その動作はぎこちなく、緩慢で、まるで芋虫が這うようだった。ベッドからフローリングへの移動に失敗し、派手に落ちてしまったが、それでも彼女は気にしない。全身をもぞもぞと動かして、木曾の足元へと向かう。

「あ、はっ…♥」

壊れたような、歓喜の声をあげる霧島。這って木曾のもとに進む彼女に、木曾は、スカートをたくし上げて応えたのだ。彼女は、スカートの下に何も履いていなかった。そのために、彼女のふたなりおちんぼが露わになる。それは、霧島が初めて見る男性器だった。画像ファイルや動画ファイルで見た事はあっても、生ちんぼは、見るのすら初めてなのだ。霧島が歓喜の声をあげてしまったのも、無理からぬ事だった。

「おちんぼ、おちんぼ、おちんぼおっ…♥」

木曾の足元にたどり着いた惨めな芋虫は、のろのろと上体を起こす。正座しようとして失敗し横座りになってしまうが、構わず愛しいその名を呼びながら、顔をちんぼへと近付ける。鼻先まで来ると、むわっとした雄の臭いが漂ってきた。

これだ。

これが、欲しかったのだ。

「おちんぼ様、おちんぼ様っ…♥ くださいっ…♥ お願いしますっ…♥ おちんぼ様、くださいっ…♥」

霧島のその言葉は、懇願と呼ぶのが正しかった。我慢できないとばかりに口を大きく開けて、だらしなく舌を垂れ下げさせ、はぁはぁと熱い吐息を木曾ちんぼに吹きかけてしまうその姿からは、知性も気品も感じられない。ただの、発情した雌豚である。

恥も外聞も、あろう筈がなかった。あれほど夢にまで見たモノが、目の前

に、手の届く…どころか、口の届く場所にあるのである。しかも、彼女が息を吹きかけるたび、むくむくとちんぽは勃起していく。リアルタイムで勃起していくちんぽを見せられて、ちんぽ狂いの肉便器が、正気を保てる訳がないのだ。

「んんうっ…♥」

くくっ、と、喉を鳴らして木曾が笑ったと思うと、彼女は軽く腰を突き出した。そして、熱く、硬く、そして大きくなった亀頭の先端を、霧島の唇に擦り付け始めた。大きく開いた口の一番上から、ゆっくりと、時計回りに擦り付けていく。もうそれだけで、霧島は得も言われぬ愉悦に顔を歪ませ、吸い付くように口をすぼめた。その結果、ちょうど、鈴口を吸うような形になる。

「くふふっ…♥ いい子だな、霧島…♥ お前は、本当にいい子だよ…♥
俺の見込んだ通りの、雌豚…いや、肉便器だ…!♥」

そんな霧島の様子に、木曾の嗜虐心はある程度、満足したようだ。右手を霧島の頭に置き、二、三度、優しく撫でて、褒めてやる。そう、雌豚という称号も、肉便器という称号も、どちらも、彼女からしてみれば褒め言葉だった。実際、そう言われた霧島は、内心、喜んでいて。ずっと、待ち望んでいた言葉だった。海軍軍人最高の栄誉の一つである個人感状を貰った時よりも、ずっとずっと、嬉しかった。

彼女は、自分をそう呼んでくれる人を待っていたのだ。雌豚と罵り、肉便器と蔑み、ダッチワイフと嘲ってくれる人。自らの口、アナル、そしてまんこを、ちんぽしごきの穴として…即ち、オナホールとしてのみ見てくれる人。自らを組み伏せ、ただ性欲処理のためだけに犯してくれる人。そういう人を、ずっと、待ち望んでいたのである。

そしてその歓喜とともに、霧島の口は、いや、口オナホは、ちんぽに貫かれた。霧島の頭を撫でていた手は、突如彼女の後頭部を掴み、木曾の股間に向けて押し付けたのである。

「んぐむうっ!!♥♥」

一瞬で、ちんぽは根元までねじ込まれた。霧島の赤い唇は、木曾の股間にキスしてしまう。上唇は木曾の下腹部に、下唇は玉袋に触れていた。そして、無理矢理飲み込まされたちんぽは、のどちんぽを擦りながら喉奥へ、食道へ侵入する。勃起した木曾のちんぽが、霧島の食道をみちみちと拡張していく。その瞬間、霧島の意識には、電撃のような歓喜が走り抜けた。自らを雌豚と、肉便器と罵られた歓喜を万倍も上回る、極めて大きな歓喜である。

「くっ…！♥ お前、自分が何されてんのか、判ってんのか？♥ 今お前が啞えてるもんが何だか、判ってんのか？♥ ん？♥ そいつはあれだぞ、ちんぽだぞ？♥ おしっこを出すとこだぞ？♥ それをお前は、なんだ？♥ そんなきつたねーもん、無理矢理啞えさせられてるってのに…心の底から嬉しそーに、顔蕩けさせてよ♥ まったく…どうしようもないマゾ便器だなっ…！♥」

嗜虐の喜びに興奮した顔で自らを罵る木曾の言葉に、しかし、霧島は興奮し、こくこくと頷こうとする。だが、できなかった。木曾が両手で彼女の頭を固定したかと思うと、そのまま、彼女の頭を激しく前後させ始めたからである。

その動きは、少なくとも、人間の頭を動かすようなやり方ではなかった。まるで、オナホールを使うかのようなようだった。オナニー用の玩具を使うかのように、激しく…本当に激しく、霧島の頭を動かしていた。霧島の事など一切考えず、ただただ木曾が気持ちよくなるためだけに、木曾のちんぽを気持ちよくするためだけに、霧島の頭は動かされていた。

「んぐうっ♥ んむうっ♥ んぶっ♥ ぶうっ♥ ぐっ♥ んぶうっ♥ ぶうっ♥」

霧島にしてみれば、それがたまらなく嬉しかった。

何度も何度も喉奥を突かれる、それだけではない。食道を、文字通りのオナホールとしてすら、使われるのである。亀頭は彼女の食道を拡張しながら、その粘膜と容赦なくこすれあう。生理反応で瞳からは涙が零れ、嘔吐感から幾度となくえずいてしまう。だが、それがいいのだ。最高に、感じるのだ。それは、彼女が望んだ、肉便器としての扱い、肉オナホとしての扱い、性奴隷としての扱い、そのものなのだから。

「あーあー…♥ ぶーぶー鳴いちゃってまあ、この豚は…♥ くふふ…♥ よがってんだろ？♥ なぁ…気持ちいいんだろ？♥ 喉をちんぽでほじられて、気持ちいいんだろ？♥ だから、ぶーぶー言っちゃもうんだろ？♥ くふふっ…♥」

イラマチオのたび喉奥からひねり出されるくぐもった声は、霧島が意識して出したものではない。だが、もしかしたら、木曾の言う通りなのかもしれない。霧島がなりたいものは、様々に表現できる。肉便器とか、ダッチワイフとか、肉オナホとかいった風に。その中には、雌豚という表現も確かにあった。

そうだ、自分は豚になったのだ。だから、みっともなく、惨めに、ぶうぶう

と鳴いてしまうのだ。自分はそう鳴くべきなのだ。人間みたいな苦悶の声ではなく、豚らしい鳴き声をあげるべきなのだ…そんな思考が、霧島の脳内を駆け巡る。

「んぶっ♥ ぶっ♥ ぶうっ♥ んぶうっ♥ ぶうっ♥ ぶううっ♥」

一度でもそう思ってしまったら、もう、止まらない。霧島は、意識して、豚のような鳴き声をあげ始めた。頭の動きは完全に木曾の意思である以上難しい事だが、不可能ではない。何より、興奮する。裸の自分が、喉をオナホとして使われながら、豚の鳴き声をあげるなど、最高に屈辱的だ。だからこそ、興奮する。

「ああ、そうそう…いい取っ手があったのを、忘れてたな♥ こいつを持てば、もっと楽にオナホが使えるな？ くくっ…♥ これ、そういうモノなんだろう？♥ 霧島型口オナホの取っ手としてついてんだろう、これは？♥」

そう言って木曾は、霧島の頭部アンテナに手を伸ばす。三日前のように両手でがっちりと掴むとその言葉通り、取っ手として使い始める。その使われ方は、自らが性処理用の道具として使われていると、霧島に再度自覚させるのに、十分だった。霧島の秘部はもう、愛液でぐちょぐちょのどろどろになっていた。興奮のあまり、失禁してしまいそうでしたらあった。

「さーて、と…！♥」

木曾が小さく呟く。と同時に、自らの股間に、霧島の頭を押し付ける。そして、そのままの状態、固定してしまった。当然、木曾のちんぼは食道まで入り込んでいる。そのちんぼは気道を塞ぎ、霧島の呼吸を阻害していた。もし木曾がこのままずっと動かなければ、遠からず、霧島は窒息してしまうだろう。

「ふふふ…なあ、霧島。いい事を教えてやろう♥ 首吊りとか、首絞めで、意識が途切れる直前…その瞬間って、死ぬほど気持ちいいんだって、さ♥ 何でも幻覚症状みたいなのが起きて、それを脳が快感と勘違いして…ふふっ♥ コカインきめた時と同じぐらい気持ちいいんだってよ♥ 首絞めセックスが気持ちいいのも、そのせいなんだと…♥」

それは、霧島も知っている事だった。彼女自身、だからこそ、イラマチオが好きだという側面があった。オナニー中にバイブを喉の奥まで咥え込み、自らの呼吸を阻害する行為は、たまたまなく気持ちよく、興奮した。

だが、それと今は、一つだけ異なる点がある。オナニーでは、バイブをねじ込むも、吐き出すも、全ては霧島のコントロール下にあった。彼女が命の危険を感じれば、即座にバイブを吐き出す事ができた。この間のようにやり過ぎ

て気絶する場合もあり得るが、それはあくまで、彼女が暴走した結果である。

今は違う。木曾が全てを握っている。全ては木曾の機嫌次第。彼女がその気になれば、霧島を窒息死させる事も可能だ。霧島の命は、木曾と、木曾のちんぽが握っている。霧島にとって、これほど興奮する状況もなかった。自らの命すら、ちんぽに握られている状況。それは、肉便器にとって、この上なく相応しいものだった。

「ん、う、ぐ、う、ぐ、んっ、んんうっ…♥」

木曾は動こうとしない。呼吸を阻害されたままの霧島は、徐々に、酸素がなくなってくる。脳が、酸素が足りないと警告を発する。視界がぼやけ、意識が朦朧とし始める。だが霧島は、暴れようとはしなかった。暴れて抵抗しようとは、しなかったのだ。むしろ彼女は、進んで自らの命を、木曾に…いや、木曾のちんぽに、捧げていた。このまま死ぬのならば、本望だった。そうなれば、オナホとしての人生が完成する。そんな風にすら、彼女には思えた。

「くふふ…♥ よーいしょ、っと！♥」

霧島の意識が落ちる直前、それを見計らっていた木曾は、掛け声とともに彼女の頭を押した。今や取っ手でしかなかった頭部アンテナを握り、前に押し出したのである。結果、ちんぽは霧島の口から抜けていく。食道の粘膜を、ぞるるるっ！♥ と、木曾のちんぽが強烈にえぐる。その瞬間、霧島は絶頂を迎えていた。酸欠による半幻覚症状が彼女の身体を昂らせ、食道オナホへの刺激が、絶頂に導いたのだ。

普通の女なら、絶頂するには秘部を弄る必要がある。酸欠状態になって、ちんぽに食道を擦られる…ただそれだけで霧島がイッたという事実は、彼女が、それほどのマゾ便器だという事実を示していた。

そんな肉便器の取っ手から、木曾は手を離す。ようやく解放された霧島が、その場へ四つん這いになる。

「んお、お、ほおっ…！♥ く、はあっ…♥ はあーっ、はあーっ、はあーっ、はあーっ…！♥」

霧島は、ぜえぜえと息を切らせて呼吸する。室内の淀んだ空気が、しかし、新鮮な空気に感じられる。同時に、自らの股間と太腿が、生暖かく感じられた。彼女自身も気付かない内に、失禁してしまっていたのだ。おそらく、先程絶頂した時だろう。

もっと…もっと、気持ちよくなりたい。もっと、壊されたい。殺されてもいい。いや、殺してほしい。ちんぽに殺されたい—酸欠で回らない頭でそんな事

を考える彼女は、頭部のアンテナを外した。

艦娘は、何かしらの艤装を装備する限り、軍艦と同等の耐久性を有する。装備すると五感がなくなる訳ではないが、ともかく…木曾の前でこれを外したという事は、即ち、生殺与奪の権利を彼女に明け渡したという事だ。いきなり窒息責めをしてくるような、危険な相手に一自らの命を捧げたという事だ。

肉欲に揺れる瞳で、上目遣いに木曾へ視線を送る。その視線を受けた木曾は木曾で、緑の隻眼が笑み、口角を吊り上げた。

「くくっ…！♥ 喉まんこをちんぽでこすられて、ンホ声あげてイって…気持ちよすぎて嬉ションまでして…♥ その上、そうしちゃうか♥ いい子だねえ…♥ 自分の立場が判ってるみたいだな、ん？♥ そうだよ…霧島、お前は便器だ♥ お前は俺の、口便器なのさ♥ ちんぽを気持ちよくするのがお前の仕事なんだ♥ ほら…きちんと仕事しろ、よっ！♥」

霧島の頭を両手でがっちり掴む木曾。再び、根元までちんぽがねじ込まれる。霧島の呼吸はまだ、充分でなかった。ぜえぜえと息を切らせる彼女はまだ、酸欠から回復しきっていない。だが、亀頭は容赦なく食道へ侵入し、気道を塞ぐ。

また、あの快樂を与えられるのだ。あの酸欠の快樂を。そう思うと、霧島は右手を秘部に、左手を胸に移動させる。あろう事か、彼女はこの状況で自慰を始めていた。頭を掴まれ、喉の奥までちんぽを突き入れられ、呼吸を阻害されながら、しかし、彼女は自らの胸を乱暴に揉みしだき、秘部をぐちゅぐちゅに搔き回し始めた。

乱暴に揉まれる乳房が痛い。だから、気持ちいい。酸欠だから、普段より何倍も気持ちいい。これなら、乳首をいじめればもっと気持ちよくなるだろう。そう思って乳首をつまみ、思い切り引っ張る。

痛い。

痛くて痛くて、気持ちいい。

「あ…♥ほんっと、気持ちいいな…♥喉がすっげー動いてるよ…♥電動オナホみたいだよ、お前の喉まんこ…♥とっても優秀な、オナホールだよ…♥」

歪んだ賛辞を浴びせながら、霧島の意識が落ちる直前を見計らって頭を押し、再びちんぽを抜く木曾。おそらく、この行為に慣れているのだろう。木曾の窒息イラマチオは極めて絶妙で、本当の本当に窒息する直前、食道からちんぽを抜いている。霧島自身が窒息オナニーをしても、ここまで絶妙にコントロ

ールする事はできない。

木曾がちんぼを抜く際、酸欠状態の食道の粘膜は、再度、激しく刺激される。その刺激は、彼女を二度目の絶頂に導いた。ビクン、ビクンッ、と身体が大きく痙攣し、その場にうずくまる霧島は、しかし、自慰行為をやめない。酸欠で窒息しかかり、死にそうな目に遭いながら絶頂し、しかし、乳首をいじめ、狂ったように膣内を掻き回す。その光景はまるで、もっと、もっとと叫んでいるかのようですらあった。

「いいねえ、いいねえ…！♥ 俺のオナホになれ、霧島っ！♥ 窒息しそうになって…ちんぼに殺されそうになって、それで意識ぼーっとしながら気持ちよくなってよがっちゃう、マゾ豚口便器になっちゃう…♥ 俺だけの、ダッチワイフになっちゃう…っ！♥」

そんな霧島の様子が、随分とお気に召したらしい。木曾も相当に興奮している様子である。霧島の頭を掴むと、ちんぼを食道までねじ込む。そして、窒息寸前になっては抜き、霧島が僅かに呼吸すれば再び食道まで突き入れ、と、窒息イラマチオをひたすら繰り返した。木曾が十分な呼吸を許さないため、その周期は徐々に短くなっていく。

もう、霧島にしてみれば、天国だった。夢にまで見たちんぼに犯され、大好きなイラマチオをされている。もう、何度も何度もイっていた。あまりの気持ちよさに、死んでしまいそうな気すらした。これで死ぬなら本望だった。霧島は、本気でそう思っていた。

(おちんぼ、おちんぼ、おちんぼおっ…♥ おちんぼ、気持ちいい…♥ もう私は、おちんぼ様の虜ですっ…♥ 木曾様のおちんぼ様の、奴隷ですっ♥ 私の喉は、木曾様のおちんぼ様の形になってしまいました…♥ 他のちんぼを啜えたら、違和感を…いえ、食事しても違和感を覚えてしまいますっ…♥ 私は、木曾様のおちんぼ様専用オナホになりましたあっ…♥)

何度も何度も窒息寸前まで追い詰められながら、霧島はそんな事を考えていた。タイミングを掴んで言葉にしようかと思ったが、酸欠とあまりの快感に、それどころではなかった。だが、彼女が木曾に…いや、木曾のちんぼに屈服しているのは事実だった。既に、身も心も、捧げていた。このちんぼのためなら、彼女は何でもするだろう。文字通り、何でもだ。

その彼女はついに、窒息責めから解放される。もう何度目か判らない窒息直前のちんぼ抜き取り動作の後、木曾は、初めて十分な時間を与えた。うずくまった霧島が酸素を脳に補充し、多少は息を整えられるだけの時間を与えたので

ある。霧島はそれでも、ぜえぜえと音が聞こえてくるほどに息を切らせていたが、周囲を気にする余裕はできた。苦悶と快樂がないまぜになった顔で首をひねり、上目遣いに木曾を見る。その木曾は、口角を吊り上げ、邪悪な嗜虐の笑みを浮かべていた。

「くふふつ…♥ いい気分だろう、喉まんこだけ犯されるのは？♥ ふふ…俺は乳首触ってやってねえし、おまんこをほじってもやってない。だが、お前はそうやって、気持ちよさそうによがってる。喉まんこを俺の形に調教されて、喜んで…オナニーまでしちゃってる♥ 何故だか分かるか？♥ それはな、霧島、お前が肉便器だからだ…♥ おちんぼ様に気持ちよくなっていただいて、気持ちよく排泄していただく…♥ 精液とおしっこを、飲ませていただく…♥ そういう事のためだけに存在してる、口便器だからだ…♥」

木曾の言葉に、霧島は笑顔を浮かべた。それは、しかし、人間の笑顔ではなかった。だらしなく歪んだ、壊れた笑顔だった。自由の利かない身体を必死に動かして、僅かに上体を起こすと、その笑顔のまま、こくこくと必死に頷く。何か喋ろうとするが、過酷な窒息責めのせいか、上手く声を出す事ができない。ヒューヒューと、掠れた音がするだけである。

それは滑稽で、同時に悲惨な光景だった。霧島自身は幸せ以外何も感じていないが、傍から見れば、それは凄惨だと表現するしかなかったろう。だが、その場には、傍から見る事のできる第三者など、いはしなかった。幸せな自分—霧島と、幸せを与えてくれる主人しか、その場にはいなかった。

「さーて、と…♥ じゃあ、そろそろ俺の事も気持ちよくしてもらおうかね♥ その、とろっとろの喉まんこで、よ…♥」

今までの窒息責めで、木曾が気持ちよくないという事はないだろう。霧島の唾液—大量の泡を立てたそれは、涎と言うよりは最早、えずき汁と呼んだ方が適切だった—で光る木曾のちんぼが、いよいよ大きく、硬くなっているところからもそれは判る。彼女が言っている「気持ちよく」というのは、要は、射精の事だった。今やちんぼ狂いの色狂いと化した霧島にも、その事は判った。

木曾はその霧島を乱暴に抱きかかえると、ベッドの上に、転がすように投げ飛ばした。ベッドの上に、仰向けに転がる霧島。彼女はそのまま、頭だけベッドの端から出るように、頭をだらんと垂れ下げさせられた。この時点で、これから何をされるのか、彼女は悟っていた。知識として知ってはいても、された事はないプレイ。オナニーで実践してみた事すらない激しい口まんこレイプ

を、これからされるのだ。そう思うと、胸が高鳴った。

「き、そ、さま、あ…っ♥ お、ねがい、しま、す…っ♥ わたひ、で…♥
わらひの、お口、で…♥ きもひよく、なって、くだひやい…っ♥」

息も絶え絶えに、それだけの言葉を絞り出した霧島。とぎれとぎれにしか、喋る事はできなかった。その顔は、懇願するかのようですらある。そんな彼女の様子を見て、木曾の嗜虐心が、刺激されない訳がなかった。

「くくくっ…！♥ 勿論だよ…♥ 霧島のお口まんこで…俺のちんぼ、いっぱい気持ちよくなるよ…♥ ふふ、ふっ、ふふふっ…♥」

思わず喉を鳴らして笑いながら、先走りと霧島の唾液でぐちょぐちょになったちんぼに手を添える。そして、だらりと垂れ下がった霧島の頭、その口に、強引に突き入れた。仰向けになった霧島は、ベッドの端から頭だけ出している。ベッドの端から垂れ下げたその頭は、ちょうど、人工呼吸の気道確保のような格好になっていた。そのため、口から食道までは一直線であり、ちんぼは、先程までより奥まで入る。

それは、たまらなく気持ちのいい、文字通りの快感だった。木曾は恍惚とした表情を浮かべながら、激しく、腰を前後させ始める。自らが気持ちよくなるために。同時に霧島も、最高に興奮していた。反り返ったちんぼが食道に食い込み、たまらない吐き気を催す。唾液が大量に分泌されてぬめりを良くし、えづけば喉が蠢いてちんぼを刺激する。

「ほんっと、気持ちいい…♥ お前は本当、優秀な便器だな…♥ これからずっと、俺のモノとして、飼ってやるからな…♥ お前は俺の所有物だ…♥ 俺のペットで、俺の便器で、俺の、オナホだ…♥」

木曾の口調は、恋人に優しく語り掛ける類のものであった。しかしその一方で、腰の動きはいよいよ激しくなる。その様子を、まるでおまんこを犯すように、と表現するのは、あまり適切でない。むしろ彼女は、ダッチワイフでも犯すかのような勢いで、激しく腰を振っていた。彼女の腰遣いは、口とのセックスと言うよりは、ダッチワイフ相手のオナニーと呼んだ方が余程適切な、荒々しいものだった。

そんな風にしていれば、木曾とて長くは保たない。激しく腰を前後させる中、徐々に、限界が近付いてくる。一方霧島とは言えば、ある意味既に限界を越えていた。木曾の前後運動はあまりに激しく、食道を擦られるたび、絶頂に上り詰めている。目は白目を剥きかかっているし、涎は漏れ放題、鼻水も垂れて、涙もとめどなく流れている。しかも、仰向けに頭を垂れ下げさせている状

態だから、涎も鼻水も、顔全体を伝って流れていく。控えめに表現しても、惨い、と言える状態だった。木曾も、一度うっかりちんぼ全体を抜いてしまった時、その顔を目撃する。

「くく、くくくっ…♥ すげー顔してるぞ、霧島…♥ くふふっ…♥ そういう顔、大好きだよ…♥ 死にそうになりながら、それでもちんぼに使われるために口を開ける…まさに口便器だな♥ 模範的な肉便器だよ、お前は♥」

普通ならあまりのひどさに引いてしまうような顔でも、木曾からしてみれば、興奮のスパイスにしかならなかったようである。罵倒に近い歪んだ賞賛を浴びせかけてやると、霧島も、嬉しそうに、にへ、と笑う。その直後、彼女の口には再びちんぼがねじ込まれ、木曾のオナニーは再開される。木曾の絶頂はもう、近かった。

「あーきもちい…♥ 俺も、そろそろ、いきそ…♥ イく、イく、イっ…イ、くうっ!♥」

激しい前後運動の末、木曾もついに、我慢の限界を迎えた。喉の奥までちんぼをねじこむと、そのまま、びゅううううう、と音が聞こえてきそうな勢いで射精する。口腔内に出したのではなく、食道に直接射精したのである。霧島にはもう、飲み込むという選択肢しかない。食道から直接胃にむけて精液がぼたぼたと落ちていく様子は、さながら、食道という名のオナホ機能付配水管から、胃という名の下水に向けて、排水しているかのようですらあった。

「つつっ♥ つ♥ つつつ♥」

食道の奥で射精されてしまえば、霧島にできる事は、ただただ精液を受け入れる事だけである。時折唸るような音が漏れてくるだけで、歓喜の声をあげる事すら、できない。

そう、歓喜。歓喜である。肉便器である霧島にとって、精液を排泄していただく事、ちんぼの排泄物を受け入れる事は、何よりも尊い価値を持っていた。便器とは、そのためにあるからだ。小便器が何のためにあるかと言えば、それは、男性器の排泄物を受け止め、下水へ流すためにあるのだ。その便器としての役割を果たしているという満足感、初めてのおちんぼに初めてのレイプという異常な興奮、その双方が相乗効果となって霧島の頭脳を焼いていく。彼女は、壊れたように絶頂し続けていた。

そんな様子を見た木曾はくすりと嗤うと、射精しながら腰を少しだけ引く。すると、ちょうど鈴口が舌のあたりまで来る。その状態で射精された精液も、本能的に飲み込もうとする霧島だが、しかし、一部は失敗した。精液が鼻

腔を逆流し、鼻水と一緒に精液までもが霧島の顔を伝って落ちていく。それでも霧島は、幸せそうにいき続いていた。

「あーあら…こりやすげえな…♥ 顔も、口ん中も、ぜーんぶ精液まみれになって…イきまくってら♥ ふふふつ…気持ちいいだろうなあ…♥ 口便器にとってみりゃ、食道までちんぽ突っ込まれて、それで精液恵んでいただくなんて…最高の喜びだもんな？♥ 気持ちよくて、嬉しくて…イきまくっちゃってるんだな？♥ 死ぬほど気持ちいいだろうな…くふふつ…♥ そこまで幸せそうだと、いっそ羨ましくすらあるよ…♥」

射精を終え、満足そうな笑顔を浮かべる木曾。霧島の唾液と自らの精液でべとべとになったちんぽを抜き取るが、しかし、霧島の口はだらしなく開いたままだった。まるで、まだ足りない、もっと欲しい、もっとおちんぽ欲しい、とでも言うかのようなのである。

霧島に、そこまで考える余裕があるとは思えなかった。喉からは、こひゅー、こひゅー、と音が聞こえる。必死に呼吸しているのだ。苦痛と幸福がないまぜになった満足そうな顔は、徹底的に口を犯された喜びに包まれていた。木曾は開いたままの口を見て、改めてにやと笑い、自らのちんぽに手を添え、再び霧島の口に近付ける。半勃起と言える程度まで萎んだそれを、しかし、今度は彼女の口腔に突き入れない。代わりに、ぎりぎりまで近付けると、鈴口から何かを放出し始めた。はじめはちょろろ…と、やがてはじよぼぼぼ…♥ と。

生暖かく、黄色く、そして、精液よりさらさらした液体。それは、おしっこだった。木曾は、放尿していた。霧島の口腔内目掛けて、放尿していたのだ。木曾は、霧島の口を、まさしく小便器として使っていた。それは、連続した絶頂の余韻に浸って放心状態になっていた霧島を、現実に戻すのに十分な効果を持っていた。ただしそれは、肉便器としての現実である。

(えへ、へ、えへへへえ…♥ おしっこ…♥ 木曾様のおしっこ、おちんぽ様のおしっこお…♥ おしっこ、ごきゅごきゅするのお…♥ ああっ♥ こぼれてる…♥ もったいない、もったいない…♥ おしっこ、全部飲むのおっ…♥)

いくら口に近付けてしているとは言え、おしっこは全部が全部、霧島の口腔内に放出される訳ではない。しぶきが顔にかかる事もある。それ自体には何ら嫌悪感はなく、むしろ嬉しいぐらいだったが、しかし、今や小便器となった霧島には、それは「もったいない」と感じられた。

小便器であれば、排泄物は可能な限り全て、受け入れなければならない。気付

けば、身体を必死に伸ばしてちんぼの先を口をつけ、そのまま、美味しそうに直飲みをし始めている自分がいた。木曾にしてみれば、その行動もまた、嗜虐心を刺激し、充足感を与えてくれるものだったようだ。

「くくくっ、くっ…♥ おしっこも、ちゃんとのめるんだな…♥ しかも、すっげー嬉しそうに…♥ おしっこを「される」とか「かけられる」じゃなくて、おしっこ「していただく」って気持ちで飲めるってのは、素晴らしい事だよ…♥ 本当によくできた肉便器だな、お前は…♥ 最高だよ、霧島…♥」

最後の一滴まで放尿を終えると、そうやって褒めながら、赤子をあやすように頭を撫でてやる木曾。彼女は、本気で霧島の事を褒めていた。会ってからそんなに経ってはいないし、愛を囁き合った訳ではない。しかし、木曾は霧島を自慢の肉便器だと思っているようだったし、少なくとも、霧島は木曾を最高のご主人様だと思っていた。恐らく、霧島が自分の意思で木曾の下を去るのは、極めて難しいだろう。それこそ、愛国者が祖国を裏切るぐらいには。

「さて、と…♥」

おしっこを最後まで出し切ると、木曾は霧島の元を離れ、ベッドの枕を取り上げる。一体何をやるのだろう、と怪訝に思う霧島は、しかし、寝返りを打つ力すらもう、残っていなかった。

木曾は、霧島の枕を、自らの股間に擦り付けた。自らの男性器に付着した、精液と唾液、そして小便を枕に塗りたくったのである。もちろん、枕カバーでそれらを拭き取った、とも表現できるだろう。その枕は、霧島のベッドの枕である。普段、霧島が頭を乗せ、また、顔を埋めて寝ているものだ。そんなものに、木曾の精液と尿を塗られてしまったのだ。霧島は、下腹部が再び熱を持つのを、感じずにはいられなかった。

これからは、家に帰ってきてベッドに飛び込めば、それだけで、精液と尿の臭いを感じる事ができるのだ。顔を枕に埋める、たったそれだけで、今日の事を思い出して自分を慰められる。そう思うと、精液と尿の臭いを嗅ぎながらオナニーする事を考えて、新しい愛液が染み出してきてしまった。もうこの布団では、二度と寝られないかもしれない。一度横になればそれだけで興奮してしまい、臭いを嗅ぎながら、気絶するまでずっとオナニーしてしまいそうだった。

「あ…あっ、あっ…♥ あ…♥ あ…♥」

その予想は、一部は的中した。

霧島の視界が、暗くなり始めていた。度重なる窒息責め、そこからのベッドの上での仰向けイラマチオ。艦娘の身体は、艤装を付けていなくともかなり頑丈だが、それでも限度はある。まして、実戦経験が少なく練度の低い霧島であれば、猶更である。気を強く持ってみようとしても、無駄だった。視界のブラックアウトは止まらない。新たに熱を持った下腹部とは真逆に、もう、霧島の頭は限界だったのである。

視界が暗くなり始めてから、完全に意識を失うまで、何秒もなかった。深い奈落の底に落ちていくような、もしくは、底なし沼に沈んでいくような感覚を覚えながら、霧島の意識は、闇に消えていった。

木曾は、霧島が気絶したのに気付くと、かすかに「くすっ」と笑った。そして、頭に血が上らないようベッドに寝かしつけて、掛け布団をかけなおし、しかし、それ以外の後始末は一切せずに、彼女の部屋を去っていった。

第三話 三人の淫宴

霧島の部下である鳥海と大淀は、同じ都内のマンションに住んでいる。いわゆるルームシェアという奴である。艦娘は、基本的に各鎮守府の寮で寝起きするが、それが全てという訳ではない。最初期は全員が海軍基地内部での寮暮らしであったが、彼女達は軍事機密の塊であると同時に人間でもあるのだ。それ故に、『人道的配慮』、即ち『人権への配慮』が必要になったのである。

トラック泊地のような海外鎮守府はともかく、内地の鎮守府に所属する艦娘の中には、一般の住宅を購入、もしくは賃貸し自宅としている者もそれなりにいる…というのが現状である。特に併設の寮がない軍令部勤務の艦娘ともなれば、そのほぼ全員が、何らかの形で自宅を持っている。

ただ、ルームシェアしているとすると、これは珍しい例だと言えた。

「んんっ…♥ 鳥海…♥」

二人が同じ部屋に住んでいる理由。それは、ベッドの上を見れば一目瞭然であった。

下着すらつけていない女体が二つ、複雑に絡み合っていた。大淀が上になり、下になった鳥海の唇にキスの雨を降らせている。二人はちょうど、愛の営みを終えつつあるところだった。どちらの身体も汗をびっしょりとかいており、先程まで行われていた行為の激しさを物語る。

要するに、二人のルームシェアは、同棲と呼んだ方がより適切なものであった。艦娘には、案外、両性愛者が多い。一説によれば、これは、彼女達が女の身体を持ちながら、軍艦としての記憶を持つからだという。軍艦には原則、男しか乗らないが故に、それは男の記憶である。だから、異性だけでなく同性にも恋し欲情するような人格が形成されやすいのではないか、という説である。

「んっ…ぶは…♥ 鳥海、今日も可愛かった…♥ このまま、寝よっか？」

満足げな表情を浮かべた大淀は、鳥海の上になったままもぞもぞと動いて、二人の身体に掛布団をかぶせる。その満面の笑みも、悪戯っぽい口調も、普段の凜とした彼女とは少し違った様子である。それは、最愛の人を前にしているのと無関係ではないだろう。

だが、鳥海の表情は浮かなかった。もちろん、先程までは、そうではなかった。大淀の手によって、彼女の顔は歓喜と興奮にまみれていた。しかし、行為を終えて性的興奮が収まると、どこか、愁いを含んだ浮かない表情に戻ってし

まった。このところ、彼女がずっと浮かべている表情である。

「ん…その、ごめんね、大淀…今日も、激しくしてもらっちゃって」

大淀の下で、鳥海は申し訳なさそうに目を伏せる。最近は、もっと激しく、と要求してしまう事が多い。何もかもを忘れたくて…自分の思考を、愛しの人とのその愛で埋め尽くして、真っ白にしたいと思うのだ。だが、事が終われば、また冷静な思考が戻ってくる。その時のどうしようもないほどの空しさが、鳥海を申し訳ない気持ちにさせていた。大淀は決して、彼女の保護者ではないのに。

「ふふ…いいんですよ。鳥海の気持ちも、少しは理解できるつもりですから」

だが、大淀は優しい笑顔を鳥海に向ける。そして「あなたを激しく責め立てるのは、楽しいですからね」と付け加え、今度は悪戯っぽく笑った。その様子に、鳥海は少しだけ救われた気分になる。

「…やっぱり、霧島さんの事ですか？」

ひとしきり笑った後、大淀は掛布団の中で横に転がると、囁くように聞いた。その問いに、鳥海は無言で頷く。その瞳は、悲しさと寂しさに揺れていた。霧島がブイン基地に異動すると聞いてから、鳥海はずっと、そうなのだ。

霧島は二人の上司であり、また、海軍の英雄である。AL/MI 作戦の際、日本海軍が北方と南方に主力を展開した間隙を突いて、深海棲艦隊は日本本土を急襲。一部の部隊は警戒線を突破し、東北に着上陸、陣地を構築した。この深海棲艦の部隊は最終的に撃滅されたが、その功績は、実に彼女のものであると言ってよい。

艦娘というのは船が人の形を成したものであるから、誕生した時から、海戦や海上での航空戦についての知識は豊富である。彼女らには一切の教育が必要なく、それこそ練度にさえ問題なければ、即座の実戦参加が可能だ。しかし一方で、陸戦についての知識や経験は、ゼロでないにしてもかなり乏しい。元が船なのだから、当然とも言えるだろう。

だからこそ、本土警戒線を突破した深海棲艦の着上陸は、危機であった。深海棲艦の厄介な点は、艦娘による攻撃しか通用しない点にある。そのため、上陸した深海棲艦への攻撃は、陸軍（旧陸上自衛隊）や空軍（旧航空自衛隊）ではなく、海軍が…いや、艦娘が担当しなければならなかった。ところが、彼女らには地上戦闘の経験どころか、ノウハウを持たなかったのである。あったものと言えば、戦艦と重巡に三式弾を積んで撃ち込めば陸上基地は破壊できる…

という程度の、ドクトリンとも言えない認識。後は、かつて陸軍部隊や陸戦隊を積載していた時や、かつての乗組員の海兵団での訓練といった、ごく僅かで頼りない記憶だけであった。

だが、深海棲艦が上陸した近くの大湊には、霧島がいた。彼女は自らの知識をもって、戦艦を砲兵部隊に、空母を航空部隊に、重巡を装甲部隊に、水雷戦隊を歩兵部隊に編成しなおした。彼女の指揮の下、陸戦の素人集団は、しかし、移動弾幕射撃や縦深攻撃、浸透戦術といった高度な任務を達成し、敵集団を殲滅したのである。

鳥海は当時横須賀鎮守府所属であり、当時、依然本土に侵入しようとする深海棲艦隊の迎撃を行っていた。それは激戦であった。そしてその戦いは、霧島が東北の上陸部隊を撃滅した時、終わったのである。上陸しても撃破される可能性が高いと判断したのか、東北の陸戦が終結すると同時に、深海棲艦の本土攻撃部隊は退却したのだった。

それもあって、鳥海は霧島に憧れ、また、尊敬している。いや、崇拝していると言ってもよいだろう。実戦部隊一筋で高い練度を誇っていた鳥海が、自ら提督に進言して参謀に転身したのは、霧島もまた参謀として働いていると知ったからである。軍令部第二部に艦娘陸戦隊総監部が作られ、その総監に霧島が就任すると聞いた時は、軍令部に直訴までした。そうやって、憧れの霧島の部下となったのである。

その霧島が、ブイン基地に引き抜かれる。ブイン基地に転属すると、先日、霧島本人から言われたのだ。大湊はともかく、鳥海にとってはショックだった。しかも、「あなた達二人がいれば安心です」「あなた達さえいれば、残りの仕事もきつとうまくいきますよ」…などと言われてしまったのは、引き留める事もできない。

鳥海はそれだけ、大湊と共に霧島から評価され、期待されているのだ。憧れの人の期待を裏切る訳にはいかない。

そして、だからこそ、鳥海の気持ちは陰鬱に沈むのである。

「ごめんね…ほんとにごめんね、大湊…」

鳥海は、すがりつくかのように、大湊の身体を抱きしめる。その目には、うつすらと涙が浮かんでいた。その鳥海を優しく抱きしめ、背中をとんとんと叩く大湊は、しかし実のところ、悪い気はしていなかった。

二人が恋人同士になった後でも、鳥海にとっては、霧島という存在が大きなウェイトを占めていた。元々、大湊が鳥海を口説き落としてこういう関係にな

ったのだが、大淀からしてみれば、霧島はいつ恋敵に変わるともされない相手であった。その霧島は遠方に転属となり、鳥海はそれを止める事もできず、頼れる相手は大淀だけ。鳥海はいよいよ大淀に依存し、激しく責めてほしいと懇願し、すがりついて泣く。

もう鳥海には、自分しかいないのだ。そう思うと、暗い笑みを噛み殺しきれなくなる。自分の胸の中で、最愛の人が泣いているのに…いや、泣いているからこそ、大淀はより口角を吊り上げて邪悪な笑みを零しながら、彼女を強く抱きしめてやるのだった。こうすれば、鳥海がだしぬけに顔をあげようとしても、上げられない。このいやらしい笑みを見られる事なく、愛する鳥海を安心させてやり、更に自分への依存度を高められるのだ。いい事づくめだった。

ここ最近、霧島の体調は非常によい。絶好調とすら言える。

それもこれも、木曾のお陰である。あれからというもの、霧島が家に帰ると、居間で木曾が待っていた。それは、勝手に作った合鍵どうやって作ったのかと問えば、企業秘密であると言われたがーを使って勝手に侵入しているのだが、家主の霧島がそれを是としていた。

何せ、霧島にしてみれば、木曾の侵入を嫌がる理由がない。

自宅に帰れば、愛しのご主人様が待ってくれている。いやらしく口を開け、豚のように這いつくばり、犬のように尻を振って媚びれば、ご主人様は立ち上がり、そっとスカートをめくる。その下には、彼女が長年望んでやまなかったおちんぼがある。彼女はそのおちんぼにむしゃぶりついて、ひたすらに、喉まんこをほじられる。まるで、本物のおまんこであるかのように。

もちろん、毎回毎回イラマチオだけしている訳ではない。木曾は何故か、彼女の処女とアナル処女を奪おうとはしなかったがーパイプにもう奪われている、という考え方もあるがー様々な方法で彼女を責めた。縛られる事もあったし、鞭で叩かれる事も、スタンガンでひたすらいじめられる事もあった。

それが、彼女の新たな日常であった。もちろん、ブイン基地への移動もあるから、これがいつまでも続く訳ではない。が、ここ数日はそれが日常となっており、それによって、霧島の心は満たされていた。

木曾、そして、木曾のちんぼという、絶対的な主の存在。それを、ご主人様とか、飼い主とか言い換える事も可能だろう。絶対的な主人がいて、その主人に屈服し、服従しているという事実が、彼女を安心させていた。

命まで握られていると言えるほど完全に、誰かに支配されている。

その確信が、彼女の心を満たすのである。

「よし、と…んーっ…！」

職場の席上、パソコンの前で身体を反らし、大きく伸びをする霧島。いつものように、仕事中に疼く事はない。家に帰れば「あるじ」がいると、確信しているからである。そして、以前のように、仕事が終わって家に帰るとどうしようもなく疼いてしまって身体を持って余す、という事もない。家に帰れば、「あるじ」に気絶するまで犯してもらえるからだ。

「霧島さん、お疲れ様です」

「あっ、ありがとうございます」

タイミングよく、鳥海がお茶を差し出してくれる。この職場に限らず、艦娘同士は互いを呼び捨てか、「さん」付けて呼ぶ事が多い。例え相手が上司であっても、元は同じ船という意識が働きやすいのだ。

湯飲みを受け取りながらふと見れば、鳥海も自分の湯飲みを持っている。どうやら、彼女自身の分を汲んでくるついでに、霧島の分も淹れてくれたようだ。しかも、鳥海の方は湯気が出るぐらい熱いお茶、霧島の方は水を入れた冷たいお茶。鳥海は熱いお茶を好むが、霧島は猫舌なため、冷たいお茶を好む。鳥海はそれを判っていて、わざわざ霧島のために用意してくれたのだ。霧島は、彼女のそういう、細やかな気遣いができることを気に入っていた。

「引継ぎの資料ですか？」

「あ、ええ。新しい人は陸戦に詳しいですし、引継ぎと言ってもやる事はあまりないですけどね」

くす、と霧島が笑う。実際、後任人事は霧島の指名が通ったため、引継ぎは楽なものだった。何せ、大湊警備府で参謀をやっていた時代の、霧島の子飼いである。能力は折り紙付きだし、現在は艦娘陸戦隊教導師団に勤務しているぐらいだから、陸戦についても精通している。スムーズに引継ぐことが可能だった。

それに、艦娘陸戦隊の戦闘教養は一応の完成を見ている。今後、演習や実戦の戦訓を通じて修正していく必要はあるが、それよりもやるべき事は、教導師団に各鎮守府の艦娘を招く事だった。彼女らに陸戦について教え、元の鎮守府に送り返し、その彼女たちが今度は教官、もしくは指揮官として、各鎮守府に陸戦隊を創設する。

これからの総監部の仕事は、教導師団のお手伝いだ。ならば、霧島の才能は必要ない。むしろ、陸戦に精通しており、なおかつ教導師団の内情に通じた人

材…例えば、実際に在籍した経験のある人材。そういった人材の方が、これからの総監には適任だった。次の総監となる人物は、まさに、そういう人材だった。

「うふふ、心配しなくても大丈夫ですよ。確かに、私とはちょっとタイプが違いますけど…面倒見のいい方ですから」

少し暗い顔になった鳥海を安心させようと、霧島はにこやかに笑いかける。どうやら霧島は、鳥海が、次の総監がどんな人物か判らず不安に思っているのだと判断したようだ。「私には頭の上からいらない人ですから、何かあったら私に告げ口してもいいですよ」などと悪戯っぽく言ってすらいる。

霧島は、知らないのだ。鳥海が、自分に対してどんな気持ちを抱いているのかを。どうして彼女が総監部勤務になったのかすら、知らないのである。彼女が軍令部に直訴してまで自らの部下になりたがっていたのだという事はもちろん、自分自身が彼女の憧れの人物だという事も、知らないのだった。

「あ、そうだ。鳥海さん…大淀さんも。ええーと、会った事なくても、木曾さんの事、知ってはいますよね。今度私が異動する、ブイン基地の参謀長」

その言葉に、思わず鳥海は顔を背ける。鳥海にしてみれば、ブインの木曾は、自らの憧れの人を連れていく張本人である。そういう反応をしてしまうのも無理からぬ事だった。幸い、その時霧島は大淀を呼ぼうとそちらを向いていたため、鳥海の反応に気付く事はなかった。

「今度の土曜日の夜なんですけど、お二人とも仕事は昼終わりで日曜は休みですよ？ 木曾さんが、お話したい事があるそうなんですよ」

軍人と言えど、休みはある。原則的に週休二日制で、休日に任務があれば代休をとれる制度があるというのは、旧自衛隊から変わっていない。もちろん戦時ともなれば話は変わってくるのだが、戦局は安定しているし、三人は前線にいる訳でもない。最低でも週に一日の休みは、確保されていた。

「ただ、木曾さんの身体が空くのが遅くて、だいたい九時かそれぐらいになってしまうそうなんですけど…そこらの飲み屋で一杯引っ掛けてから来てくれないか、なんて仰ってましたけど、どうですか？ 空いてますか？」

不安そうに聞く霧島は、上目遣いに、ちら、ちらと二人の顔色を窺う。その頃には、鳥海は霧島に背中を向け、携帯端末を取り出して弄っていた。まるで、スケジュールを確認しているかのように。だが、霧島にもう少し洞察力があれば、その背中が微かに震えているのに気付いただろう。鳥海にとっては幸いな事に、霧島は鈍感な方だった。鈍感だからこそ、先日の応接室で、木曾の

股間をふにふに揉んだのだとも言える。

「そうですね、ちょっとまだ流動的なので…鳥海さんと相談して、後でお返事させて頂ければと思います。いつまでにお返事すればよろしいでしょうか？」

鳥海の様子を察した大淀が口を開く。実際のところ、土曜の夜は二人とも、用事などない。強いて予定を挙げるとしたら、仕事を終えたら二人で帰宅する、ぐらいだろうか。だから、空いてるか空いてないかで言えば、空いている。だが、その場に鳥海が向かえるかどうかは、別の話だ。大淀なりの、気遣いだった。

「ええと、一応、前日までに言って頂ければ大丈夫との事でしたので…あ、場所は、木曾さんの泊まってるホテルがいいそうです。最寄駅どこだったかな…」

自らも携帯端末を取り出し、メモを探し始める霧島が、鳥海の様子に気付く事は、ついぞなかった。

一般的に、艦娘は金を持っている方で、木曾も例外ではない。巡洋艦以上ならば誕生したと同時に大佐だし、旧自衛隊と同様、海軍は手当てが多い。まして今は戦時だから、その厚い手当てで普段より給料は上がり、一方で、使う機会は少ない。たまる一方なのだ。

そんな訳だから、土曜の夜、大淀と鳥海が訪ねた木曾の宿泊している部屋が、いいお値段のしそうな広い部屋だったのも、納得と言えた。どうやら木曾は、こういうところをケチるタイプではないようだ。もしかしたらある程度までは経費で落ちるのかもしれないが、逆に言えば、「ある程度」以上は自分で払っているに違いない。

その部屋は、襖で和室と洋室を仕切る形になっていた。洋室側には、椅子と机や台所、浴室がある。一方、開け放たれた障子の向こうには、ベッドが設置されている。畳の上にベッドが置かれている形である。木曾は、鳥海と大淀を部屋に迎え入れると、洋室の椅子に座った。二人とは、机を挟んで反対側である。

白衣の第二種軍装の二人とは対照的に、木曾はセーラー服を着用していた。艦娘としての制服である。もっとも、外套や飾緒はクローゼットにかけてあるから、どちらかと言うと軽巡木曾としての制服に近い恰好ではある。

「いやしかし…随分飲んできたんだな、こりゃ」

木曾が呆れたように、しかしどこか愉快そうに笑う。実際、鳥海は酔っ払っていた。顔は赤く、酔っているどころか、べろんべろんに酔っ払っていた。木曾も思わず、湯飲みを用意してお茶を淹れたぐらいである。

霧島が「そこらの飲み屋で一杯引っ掛けてから来てくれてもいい」と木曾が言っていた…と述べたのは、本当の事である。木曾はそう霧島に告げたし、彼女は本気でそう思っていた。夜遅く来てもらうのだし、その前にちょっと飲んでから来るぐらい構わない、と。だが流石に、一杯どころか完全に酔っ払ってから来るとは思っていなかった。

と言っても、酔っ払っているのは鳥海だけである。大淀の方は、いくら何でもまらずと止めたのだ。だが、鳥海がその言葉を聞く事はなかった。雨の中、大淀の制止を振り切って飲み屋に入ると、普段はビールを嗜む程度なのに、一本空け、二本空け、三本空け、といくらでも飲んだ。そうしてまた、雨の中、このホテルまでやってきた訳だ。

鳥海にしてみれば、敬愛する霧島を連れていくという相手が、話があると言うのだ。その話を聞きにいかない訳にはいかない。だがその一方で、飲まずにはやっていられないという気持ちがあるのも、事実だったのである。

「悪いですか…飲んでいいって言ったのはそちらじゃないですか…」

ひっく、としゃっくりまでしている。いつもは冷静な大淀がいつになく慌てて、なんとか取り繕おうとするのも無理もない話だった。木曾も、それを責める気こそないものの、つつい苦笑を漏らしてしまう。

「ふふつ、悪いなんて言ってないさ。そうなっちゃう気持ちは、判らんでもないしな」

くすくすと含み笑いを漏らす木曾。その様子に、鳥海は「むー」とほっぺたを膨らませるだけだったが、大淀は怪訝な表情を浮かべた。「そうなっちゃう気持ちは、判らんでもない」とは、一体どういう意味なのだろうか？ この女は、大淀と鳥海の事を、どこまで知っているのだろうか？

「それで、話ってなーんーでーすーかー」

「おうおう、グイグイ押すねえ。最初は世間話から入ろうかと思ったが…じゃあ、本題を話そうか？」

一応、相手は霧島の異動先の上司になる人物なのだが、鳥海は酔っ払っているのもあって、今にも暴れそうな勢いである。その様子に、木曾は怒るでもなくやついた笑みを浮かべて、ポケットから何かを二個、取り出した。

それは、何とも表現しがたかった。強いて言うならば、干からびたウィンナ

一のような物体である。ウィナーと言っても、レストランで出てくる長大なものではなく、量販店で売られている袋詰めのもの程度の大きさである。しなびたそれは、二人にとっては正体不明だったと言ってよい。そのしなびたウィナーを一個ずつ、二人に手渡しする。

「さーて。そいつが何か気になるだろうが…まあ、聞いてくれ。二人とも、自分が艦娘である以上は、艦娘がどうやって生まれるかは知ってるな？」

「ええ、それは。はい」

知ってるな、と聞いた後、二人の目を交互に見る木曾。鳥海が答えなかったため、大淀が答える。

「ん。まあでも一応、確認しておくか。まず、艦装の素体を作る。その素体に、燃料や鋼材、そして『何か』…いわゆる、『魂』とか呼ばれるもんだな。これを注ぎ込む。そうする事で、艦装が完成する。後は適合者が装備すれば、その者は『艦娘』になる、と」

木曾は一度言葉を切ると、湯飲みをあおってから続ける。

「その適合者は、クローンを培養して用意する。オリジナルの適合者がどこの誰なのか、そもそも存在するのかつてのは軍事機密でなんともだが…まあ、ともあれ、適合者のクローンに艦装を接続すると、知識や知能がインストールされる。それで艦娘が誕生する…と、まあ、こういう訳だな」

大淀が頷く。続いて、鳥海も頷いた。二人も、そして恐らくは木曾も、そうやって生まれてきたのだ。その程度の事は、知らない筈はない。

「さて、ここで問題になるのは、適合者のクローン、って部分だ。これは海軍にしても頭の痛い話でな。やっぱ人権問題になるんだよ、これって。人権団体からの突き上げもそうだし、政府の方からも圧力がある。そりゃあ、与党からしてみりゃ、野党とマスコミの恰好の攻撃材料だからな、クローンを兵隊にしてる一、人権無視だ一、なんてのは。ちょっと海軍さんなんとかしてくださいよ、って言いたくもなるだろう」

その点についても、二人はある程度知っていた。テレビをつければ、ワイドショーでその点はよく批判されている。年端もいかない少女のクローンを作り、戦争の道具にしている、と。

本人達にしてみれば、軍艦としての経験と記憶があるために、どこか見当外れな批判だとも思う。思うのだが、現に批判されているのだから仕方ない。それに、クローンを兵隊にするのが何か不気味だというのは、判らない話ではなかった。自分もクローンなのに変な話ではあるが、そうってしまうのは事実

だった。

「さて、そこでだ。海軍としては、何とかして、クローン以外の方法で適合者を増やしたい。その方法のひとつとして、艦娘同士が恋愛して、結婚して、子供を産めばいいんじゃないか…というのが提案された」

鳥海が、飲んでいたお茶を噴出しかけた。いわゆる斜め上の発想というのは、こういうのを言うのだろう。

「これは一応ある程度証拠があるらしくて、艦娘同士の子供であれば、遺伝的な問題で、適合者になれる可能性が高いらしいんだな。ところが、艦娘は娘って言うぐらいで、女しかいない。そこで、うちの工場で開発したのがこいつなんだ」

そう言って、木曾は中腰になると、スカートをびらっとめくる。この間のように、その下には何もはいておらず…結果、彼女の陰部が露わになる。そこには、男性器があった。ありていに言えば、ちんぼである。鳥海が、今度こそお茶を吹いた。大淀も、鳥海の粗相に気付かない程度には、驚いていた。

「汚いもん見せちまって悪いな。まあ、それが、そのしなびたウィンナーみてえな奴なのさ。こいつは艀装の応用でできててな、クリトリスにくっつくと、ふたなりの男性器になる。艀装みてえなもんだから、付け外しも自由。結構便利だぜ」

そう言ったところで、木曾のポケットから音が鳴った。どうやら着信音らしい。ポケットから取り出した携帯端末を見る木曾は、にやと笑うと、「ちょうどいい」と呟いた。

その直後、木曾の部屋の前。薄手のレインコートを着た人影が、そこにはあった。緑のフレームの眼鏡、ショートカットの黒髪…それは、頭部アンテナすら外した、霧島だった。

「はあっ、はあっ、はあっ…！♥」

震える手で、呼び鈴に手を伸ばす。彼女は既に、発情しきっていた。それも当然である。今日は珍しく木曾から指示があり、「俺と同じホテルの部屋を取ってそこで待機しろ」「大淀鳥海との話し合いが終わったら俺の部屋に來い」、という風に言われていたのだ。彼女が待ちきれなくなって、そろそろいいかという旨の連絡を送ったのがついさっき。先程木曾の携帯端末が鳴ったのは、その連絡のせいだった。

ホテルの部屋で待っている間も、彼女は興奮していた。今日はいつもと違う

場所で犯してもらえ。そう思うだけで、昂るのだ。それに、木曾は普段、行為が終わるとホテルの部屋に帰ってしまう。毎日霧島の自宅に侵入して彼女の帰宅を待ってはいるが、しかし、彼女を弄んだら、ホテルに戻ってしまうのだ。

今日は違うかもしれない。木曾の部屋で犯されるのだ、終わった後、一緒にベッドで眠れるかもしれない。そう考えると、秘部は濡れてきてしまう。今日はどんな風に犯されるだろうか。今日こそ、処女を散らされるのだろうか。そのまま…ちんぽを膣に入れたまま、同じベッドで寝る…というのはどうだろう。まるで自分が、ちんぽのケースになってしまったかのように…

そんな風に考えていると、気付いた時には全裸になり、ベッドの上で自慰を始めていた。それは、自慰と言いつつも、自らを慰めるなどという生易しいものではなかった。胸を、牛の乳でも絞るかのように力を入れて潰す。ぐちゃぐちゃと音が鳴り、泡が立つほど膣内をかき混ぜる。それは、自分で自分を責める行為だった。鞆の中からパイプを取り出し、乱暴に突き刺しもした。

だが、そんな事で身体の疼きが収まる筈がなかった。「あるじ」に犯して貰わねば、収まらない。彼女のご主人様に…ちんぽに、犯されなければ。そう思うといっても経ってもいられず、自分から木曾に連絡してしまったのである。

だから、「もういいぞ。来い」という返事があった時、霧島の胸は高鳴った。痛い程に。

木曾がその返事をした時、彼女は裸だった。普通に考えたら、服を着なおさなければならない。だが昂った彼女の身体はひどく疼き、そんな悠長に構える事を許さなかった。一分一秒でも早く、犯してほしかった。だから、裸の上にレインコートを羽織り、ボタンをかけただけで部屋を出たのだ。しかも、パイプを両穴に咥えたままで、である。

どうせ木曾の部屋は同じ階で、エレベーターに乗りすらしないのだから…そう思ったのだ。それに、まんこで何かを咥え込むぐらいしておかなければ、木曾の部屋にたどり着く前に、気が狂ってしまいそうだった。だが、廊下に出てから思い出した事は、木曾の部屋が階の真反対にある、という事実だった。

それなりに歩かねばならない以上、流石にこのままではまずい。そう思ったが、彼女の疼く身体は、部屋に戻る事を許さなかった。だから彼女は、木曾の部屋に向かってそのまま歩いたのだ。薄布一枚の下は全裸である。

夜遅くの、それもホテルの廊下だからほとんど人は通らないし、下が透ける生地でもない。だが、もし人が通ったら。もし、その人に痴女だとばれてしま

ったら。そう思うと、彼女の秘部はいよいよ熱くぬめり、子宮が締め付けられるような快楽を覚えた。もしばれたら、一巻の終わりである。だからこそ、興奮したのだ。

ジリリリリ、と呼び鈴が鳴る。もう、秘部はぐちゃぐちゃのどろどろだ。自分の部屋で弄り回したせいもあるし、全裸の上にレインコートだけで廊下を歩くという、ちょっとした露出をしたせいもある。股間周辺、特に内腿は、何か飲み物をおちませたのではないかというほどにどろどろである。その秘部から立ち上ってくる自らの雌臭もまた、霧島を興奮させていた。

「よっ。ふふ…もう、出来上がってるな♥」

扉を開け、霧島を出迎えた木曾が、にたあ…♥ と口角を吊り上げる。無理もない。発情した雌の臭いを周囲に撒き散らす彼女の顔は、傍目でも判るほどに赤く、上気していた。快楽と期待でのぼせ上がり、発情しているのである。

木曾に促されて部屋に入ると、霧島がもどかしそうにレインコートを脱ぐ。ボタンを外す事すら、煩わしい。早く全裸になりたい。早く、このいやらしく育った雌豚の身体を…おちんぼ様を興奮させ、おちんぼ様を満足させるためだけに大きくなった肉便器の身体を、晒したい。そして、犯されたい。その気持ちは焦りを生み、レインコートのボタンを飛ばしてしまう。だが彼女は構わず、乱雑に脱ぎ捨てて床に放り出した。

「あはあっ…♥ はあっ、はっ、はっ、あはあっ…♥」

木曾の部屋で、全裸になる。その解放感は、筆舌に尽くしがたいものだった。

肉便器が服を着るだろうか？ 豚が服を着るだろうか？

そんな事はない。肉便器も豚も、服を着る事はない。そして霧島は、木曾の肉便器であり、家畜…雌豚だ。ならば、服を着ているべきではない。本来の自分に、戻らねばならない。肉便器に。肉オナホに。ダッチワイフに。雌豚に。

そして彼女は、本当の自分になる事ができた。木曾の泊まる部屋の中、自分だけが裸の豚。性処理用の、家畜。そんな自分を見る飼い主は、にやついた笑みを浮かべて、いやらしい視線を送ってきている。彼女も、興奮しているのだ。いやらしい雌豚の身体を見て、興奮してくれているのだ。そう思うと、もういてもたってもいられない。木曾に促されて洋室の中央まで来ると、霧島は自ら四つん這いになる。

「ご主人様っ…♥ 私、私は、肉便器です…♥ ご主人様の性欲を処理するための、便器ですっ…♥ 私の身体は全て、ご主人様を…おちんぼ様を喜ばせ

るために、存在しています♥ お口も、おまんこも、アナルも、全て…♥ おちんぼ様がずぼずぼして、精液を排泄するための、便器穴です…♥」

木曾にそうしろと言われた訳でもないのに、四足になった霧島は、便器としての、家畜としての口上を述べる。もう、我慢できない。早く犯してほしかった。早く、いじめてほしかった。だから媚びる。ご主人様と、そのおちんぼ様に、媚びるのだ。尻をいやらしく左右に振れば、両穴から生えた二本のバイブも尻尾のように動く。そうやって媚びれば、おちんぼ様に大きくなって頂けるだろう。そうしたら、犯していただいてもするだろう。彼女はそういう事だけを、考えている。

彼女は、知らなかったし、気付いていなかった。

まだ、鳥海と大淀はこの部屋にいるのだという事を。

木曾に言われて、和室の中から襖越しに、洋室の様子を窺っているのだという事を。

「お願いいたします…♥ 便器の役目を…♥ おちんぼ様に使って頂いて、排泄物を受け止めるっていう、私の役目を…♥ お願いです…♥ 私の身体、使って頂きたいんです…♥ 何されても、いいですから…♥ 叩かれても、薬使われても…♥ 何されても、受け止めます…♥ だから、だからあつ…♥ ご主人様あ…♥ お情けを…♥ お情けを、くださいませえ…♥」

豚のような四つん這いのまま、額をカーベットに擦り付けて懇願する霧島。土下座と四つん這いを合わせたような、滑稽な姿だった。もし彼女が、部下の二人がこの姿を見ていると気付いていれば、もう少し違った行動をとっただろう。だが、色に狂った雌豚が、息を潜めてこちらを観察する存在に気付く筈などなかった。ただただ、情けを求めて身体を震わせ、股間を濡らすだけだ。

「くくく…♥ どーしよーもねえ変態だな、え？♥ 俺は、今日、お前の部下との話し合いが終わったら部屋に來い…としか、言ってないんだぜ？♥ 入ったらすぐ裸になれとか…ましてや、まんこにこんなもんぶっ刺して來いだなんて、そんな命令はしてないぜ？♥ それともあれか、俺の記憶違いか？♥ そういう命令、無意識の内にしちゃってたかな？♥」

一方木曾とは言えば、くすくすと含み笑いを漏らしながら霧島の尻側に回り込み、足の爪先で、まんこ側のバイブをつつく。つん、つんっつつつたびにバイブが霧島のまんこに押し込まれ、霧島が小さい悲鳴のような嬌声をあげる。バイブが押し込まれるせいで、龟头を模した部分と、降りてきていた子宮の口が、ディーブキスしてしまうのだ。

「ぐ、ひいっ…♥ い、言われてないですうっ…♥ ごめんなさいいっ…♥
これは、これはあっ…♥ ご主人様に、犯して頂きたくて…♥ 我慢、できな
くてえっ…♥ おまんこ寂しくて、バイブ…偽ちんぼ、いれたまま来ちゃった
んです…♥ 淫乱処女まんこに、偽ちんぼをしゃぶらせてあげないと、おか
しくなっちゃいそうだったんです…♥ 偽ちんぼで貫通済の、私の偽処女まん
こは淫乱だから、何かしゃぶってないとおかしくなってしまうんです…♥ ご
めんなさい、ごめんなさいっ…♥ どうしようもない淫乱便器でごめんなさい
いっ…♥」

そんな風に雑に扱われると、霧島はいよいよ、喜んでしまう。四つん這いから正座しての土下座に移行し、額だけでなく顔全体をカーベットに埋める。鼻は潰れ、顔を左右に振れば、カーベットに顔全体が擦られる。彼女は自ら、より屈辱的な体勢を求めている。屈辱的であればあるほど、興奮するからである。

「くふ、いいぞいいぞ…♥ 謝れ謝れ、好きなだけ謝れ♥ 謝ると、ぞくぞくしちまうんだらう？♥ 自分がいかに惨めで、情けなくて、どうしようもない底辺の存在か…謝ると、認識しちゃうんだらう？♥ それが、たまらなく気持ちいいんだらう？♥ ん？♥ 違うか、雌豚あっ！♥」

ぱあっ！♥ と、部屋中に響くほどの音が鳴る。木曾が、霧島の尻を平手打ちしたのだ。霧島の尻から全身に、痛みが駆け巡る。艦娘は艦装をつけていれば、それが頭部アンテナであったとしても極めて強靱な肉体を持ち、砲弾の直撃も耐える。だが、今の彼女は、そのアンテナすらつけていない。今の霧島は、普通の人間と同じだった。普通の人間と同じように痛みを感じ…そして、喉の奥から絞り出したかのような、何とも表現しがたい呻き声をあげ、その場に突っ伏した。そのまま、身体を痙攣させている。

彼女は、いったのだ。罵倒され、尻を叩かれただけで、イってしまったのだ。木曾はまだ、ほとんど何もしていない。ちょっと馬鹿にしてやって、ちょっとバイブを小突いて、それからちょっと尻を叩いた…ただそれだけだ。にも関わらず、霧島は土下座の体勢を崩してカーベットに突っ伏し、痙攣している。

バイブを咥え込んだままひくつく秘部からは、ちょろろろ…♥ と黄色い液体が染み出してきた。失禁しているのだ。霧島は、バイブを咥え込んだまま自ら裸になって土下座し、それを罵倒されて尻を叩かれただけで絶頂し、その上、失禁してしまったのである。横を向いた顔は、ほとんどを白目を剥いて口

をだらしなく開け、いわゆるアへ顔になってアホ面を晒している。淫乱という言葉では形容しきれないほどの、変態マゾ豚だった。

「はあっ、はあっ、はあっ、へえっ、ああっ、へえっ…♥ あ、う…？」

失禁し続けながら、絶頂の余韻に浸る霧島。最初はあまりの快感から、視界はぼやけ、何も目に入っては来なかった。しかし徐々に絶頂の波が引き、視界が戻ってくると、妙な事に気付いた。彼女の頭は襖の方を向いていたのだが、その襖が、開いている。人影が、見える。誰かが襖を開けて、こちらに歩いて来ていた。

「…鳥海、さん……？♥」

にへら、と壊れた笑顔を浮かべて、自らの部下の名を呼ぶ。鳥海の後ろには、珍しくおろおろしている大淀も見えた。だが、霧島の注意をまず引いたのは、鳥海だった。今日職場で別れた時の、白衣の二種軍装のまま、彼女はこちらに歩いてくる。しかしその顔は、いつもとは違った。それは、霧島の知る鳥海の顔ではなかった。知性と勇敢さが共存する、凛とした鳥海の顔では、なかった。

「はい、鳥海ですよ…♥ 霧島さん…♥」

にたあ…♥ と、歪んだ笑顔を浮かべる鳥海。その顔は、霧島と同類のものだった。発情した、雌の顔。女ではない。彼女の浮かべる表情は、情欲にまみれた雌の顔であった。霧島は完全に発情しきって頭がイカれてしまっているのもあり、状況を呑み込む事ができない。木曾ですら、このタイミングで鳥海が出てくるのは想定外だった。

「うふふ…♥ 霧島さん…私、嬉しいんです…♥ 私ね、ずっとずっと、貴女に憧れていたんです。あのAL/MI 作戦の活躍を聞いてから、ずっと。…ふふ、あれから、貴女という存在に近付きたくて…私は、それだけを思って、生きてきたんですよ…♥ だから、ね…♥」

そう言いながら、彼女は自らの服に手をかける。ホックを外し、ボタンも外していく。ズボンのベルトを外し、下も脱いでいく。彼女の脱衣を止める者はいなかった。いや、誰も、止められなかった。

「そう、だから…嬉しいんです…♥ 霧島さんが、私と同じだったなんて…♥」

最後に、アンテナ型の頭部艀装を外し、横に放り捨てる鳥海。彼女は、それこそ盛りのついた雌犬のような顔を浮かべて、嬉しそうに、歌うように言葉を紡ぐ。そして、ファッションショーのモデルか何かのように、くると一度回

って見せた。つややかな髪が、あでやかに舞う。

だがその身体は、霧島と同じとは、とても言えなかった。

彼女の身体には多数の痣があった。腹には、殴られた痕であろう、青痣が無数にあった。身体には、荒縄で縛られた痕であろう、縄の痕が痛々しく残っていた。普段軍装の詰襟で隠れる首筋にも、縄で首を絞めた痕が残っていた。背中には、おそらく鞭で打たれた痕であろう、蚯蚓腫れが生々しく残っている。

誰も気付かないほど小さく、ほう、と感心した声をあげたのは木曾である。と言うのは、鳥海は、その身体を誇らしげに見せたのだ。それが自ら望んでつけた…いや、最愛の人に「つけてもらった」傷である事は、疑う余地がなかった。

「うふふっ…♥ どうですか？♥ 素敵でしょう…？♥ 霧島さんも、私と、同じなんですよね…？♥ こんな風な身体になって喜んでしまう、豚さんなんですよね…？♥」

そう言う鳥海の秘部は、ぐっしょりと濡れていた。彼女は明らかに、興奮していた。そして問いかけられた霧島もまた、よろよろと身体を起こし、再び、笑顔を浮かべた。

「はい…♥ その傷、大淀さんにつけてもらったんですよ…？♥ とっても、羨ましいです…♥ 私も、そんな風になりたい…♥ ご主人様に、飼われて…♥ 性欲と、ストレスの発散のために、道具にされて…♥ 死んじゃうぐらい、使われたいです…♥ ううん、そのまま死んだ方がいい…♥ ご主人様の道具として死ぬるなら、私、本望なんです…♥」

霧島の浮かべた笑顔は、まともな笑顔ではなかった。壊れた笑顔、というようなありきたりの表現では形容しきれないだろう。それは、人が浮かべていい表情ではなかった。最愛の人に自分の身体を壊されたい、殺されたいという、自己破壊願望。その願望そのものが形を成したかのような、凄絶な笑顔だった。

その狂気が伝染したのか、それとも鳥海自身がそういう狂気を元から内包していたのか…霧島の言葉と笑顔を受けて、彼女もまた、同種の笑顔を浮かべる。自分の憧れの人が、人生の目標とすら言える人が、自分と同類だったという喜び。それは、言葉では言い表せないほどの歓喜だった。一生分の幸運が同時に押し寄せたかと錯覚するほどの狂喜が、背筋を通って全身を駆け抜け、脳天まで突き抜けていく。鳥海は、それだけで達してしまいそんな感覚を覚えていた。

「霧島さん…私、嬉しいですよ…♥ ねえ…いいですよ…♥ 私、霧島さんと一つになりたい…♥ みんなで、一つになりたいですよ…♥」

鳥海が、あのしなびたウィナーのような何かを取り出し、木曾と大淀を交互に見る。木曾は楽しそうに笑い、大淀は諦めたような顔で頷いた。

大淀自身、鳥海の霧島への憧れ、そして忠誠心というものが、肉欲と未分化である事に気付いていた。それは極めて日本人的だと言っているだろう。小姓が大名に向ける忠誠心が、肉欲と混ざり合っているのと同じだ。小姓は大名の秘書であり、親衛隊であり、愛人であった。鳥海が霧島に向けていた気持ちというのは、それとよく似たものである。それ故に、鳥海の中では、大淀が最愛の人である事と、霧島にも欲情する事は矛盾しない。そこに気付いているからこそ、大淀も頷いたのだ。

それに、と、大淀は考え直した。考えようによっては、これは楽しいプレイかもしれない。最愛の人である鳥海と一緒に、その憧れの人を、二人がかりで、壊すように犯す。しかもその憧れの人というのは、自分達の上司だ。大淀自身、自らの性癖が歪んでいる事は自覚している。これから起こるであろう行為は、その歪んだ琴線に、どこか響くものがあった。だからこそ、彼女もまた、すぐににやついた笑みを浮かべ始めたのである。

「ふふふ♪ 俺は普段から、そいつで遊んでるからな。まずはお前から楽しみよ。適当なところで参加するから、さ」

椅子にどっかと腰かけて、木曾が声をかける。そして足を組みくつろいで観戦する体勢に入った。そして彼女は、ある事を提案する。

「鳥海、お前、さっきこいつが言うの聞いてたろ？ そいつ、まだ処女だぜ。…ふふつ、処女はお前が貰ってやったら、どうだ？」

それを聞いた瞬間、鳥海は、心臓が破裂するかと思った。木曾は悪戯っぽくウインクして、視線を送っている。どうやら木曾は本気らしい。本気で、処女を鳥海に譲ってやると…彼女の緑眼は、そう言っていた。

木曾が霧島の処女を奪っていなかったというのも予想外だが、その処女を、鳥海に…自らを霧島第一の「しもべ」だと思っている女にプレゼントするという提案は、彼女の想像の埒外にあった。

自分が？ 私が？ 霧島の？ 「あるじ」の処女を、奪える？

そう考えただけで、鳥海の背中にぞくぞくと何か走り、身震いして空をかき抱いてしまった。こんな、豚が？ 毎日、最愛の人に首を絞められ、鞭で叩かれ、そうやって喜んでいる自分が、忠誠を向ける相手の処女を奪える。人生

で一度きりのバージンを、手にできる。それは、想像すらした事のない幸せだった。名誉だとすら言えた。

「はいっ…♥ 頂きます…♥ 霧島さんの処女を、私が…この雌豚が、頂きますうっ…!♥」

どうにかこうにか、それだけの言葉を絞り出した鳥海は、例のしなびたウィンナーを自らのクリに当てる。すると、すぐに変化が始まった。それは、まるでフリーズドライに水をかけたかのような感じだった。気付いた時には、鳥海の股間には、勃起したふたなりちんぽがあった。

正直に言えば、霧島は、木曾の言った事を理解できていなかった。彼女はこのふたなり艷装の事を知らなかったし、木曾が何故ふたなりなのかを考えた事すらなかった。だが、鳥海のクリトリスがちんぽに変化した時、全てを理解した。

これから自分は、鳥海のちんぽで犯されるのだ。まんこにちんぽをハマられて、肉オナホとして、みずからのまんこ穴を使われるのだ。木曾すら奪おうとしなかった、自らの卑しい処女を、部下に…可愛がり、手塩にかけて育ててきた部下に、奪われるのだ。

そう考えると、霧島の方でも、ぞくぞくと背中を突き抜けていくものがあった。同時に彼女は、木曾に…ご主人様に、感謝した。あのお方は、それを見越して処女を奪わなかったのだ…彼女はそう、確信していた。今すぐに土下座して、感謝したい気持ちだった。

だが、彼女は肉便器だ。肉便器は、ちんぽには勝てない。小便器は、ちんぽの排泄物を処理するために存在している。だから目の前にちんぽを見せられれば、そこから目を離す事など、できない。彼女のそんな思考が手に取るように判るらしく、木曾は愉快そうな笑顔を浮かべ、くすくすと含み笑いを漏らしていた。

「あは、は、はっ、はあっ…♥ 嬉しい…♥ 嬉しいです…♥ 私の処女を、鳥海さんに…鳥海さんの、おちんぼ様に奪って頂けるなんて…♥ 嬉しいのお…♥ ありがとうございます…♥ 本当に、ありがとうございます…♥」

処女を奪ってくれるなんてありがとうございます、と口では言いながら、本人は今にも鳥海ちんぽにむしゃぶりついてしまいそうな勢いである。その辺の、言葉と行動の相違も、淫乱な肉便器特有のものだと言えるだろう。ちんぽを見せられると、思考と衝動の八割が、ちんぽに支配されてしまうのだ。

「じゃあ、私はアナルの処女を頂きますね…♪」

そんな霧島の背中側に、いつの間にか全裸になっていた大淀が回り込む。彼女の股間にもまた、ふたなりちんぼが生えていた。口ぶりは楽しそうに、しかしどこか威嚇するような目で、木曾に視線を送ると、「どうぞご自由に」、との答えが返ってきた。

実際のところ、大淀自身、霧島には愛着を感じている。一種の恋敵的な存在である一方、敬愛する上司であるという事もまた、事実だからだ。貰えるものは、自分達二人で貰っておきたかった。

愉快そうな笑顔を浮かべたままであるところを見ると、どうやら木曾は、最初からそのつもりだったようだが。

「本当に嬉しいです…♥ 大淀さんと一緒に、霧島さんの初めてを…両方の初めてを、頂けるなんて…♥ 夢みたいです…♥」

痣だらけの身体を近づけて、両手で腰を掴み、霧島の身体を持ち上げる鳥海。鳥海から見れば、対面立位の形。大淀から見れば、背面立位の恰好である。じゅぷ、といういやらしい音とともに、両穴のパイプが抜かれる。今や、必要ないものだった。これからは、シリコンでできた偽物ではなく、本物のちんぼが、彼女を貫くのだから。

霧島の股間は、愛液とおしっこでびしょびしょだった。陰唇が、物欲しようにひくついている。それはまるで、本物の口のようなだった。ぱくぱくさせながらだらしなく涎を垂らす、下品な口である。その欲しがりな口に、亀頭があてがわれた。それだけで、欲張る口ははしたなくちんぼに吸い付いてしまう。じゅる…♥ と、淫音が鳴った。

「鳥海、さん…♥」

正面にいる自らの部下の名前を呼び、その身体を強く抱きしめる霧島。僅かな緊張と、抱えきれないほどの期待があった。大淀もまた、彼女の菊門にちんぼを擦り付けた。そのちんぼにはローションがついており、十分なぬめりを提供していた。アナル処女を頂くと宣言した大淀に、木曾が投げてよこしたものである。

「霧島さん…大淀も、いいですね…?♥ いいですよ…?♥ 私、もう、我慢、できません…♥」

抱き着いたまま、霧島が頷いた。大淀も、軽く頷く。大淀もまた、この倒錯した状況に興奮していた。思い切り、壊れるまで、霧島を…この穴を楽しみたいと、思っていた。初めての勃起と性行為だが、不安よりも期待の方が大きかった。

ない、新しい快感に翻弄されていた。大淀はまだ、ペニスバンドで鳥海を犯した経験を持っている。が、そのペニスバンドに神経は通っていない。ちんぼという快感を生む突起で雌穴をほじるのは、初めての事だ。ましてや鳥海は、何かを突っ込むという事自体、初めてである。

ちんぼを穴に突っ込む。突っ込むと粘膜にちんぼが擦れて、気持ちいい。ちんぼを抜こうとしても、粘膜に擦れて気持ちいい。再び突き入れれば、やはり、粘膜に擦れて気持ちいい。体験した事のない新たな快感に翻弄された二人は、ひたすらに腰を振る。腰を振れば振るほど、気持ちいいのだから。

「いぎいっ…♥ ギひいっ♥ ぐひいっ♥ ひいっ♥ い、ひいっ…♥ ぐひい…♥」

しかも、二人が同時に霧島の穴を使っている。膣と腸の間の壁は、さして厚くない。だから、それぞれが霧島の穴をほじるたび、肉壁の向こうにある互いのちんぼを感じる事になる。ごつごつとしたちんぼの感触は、また、二人にえも言えぬ快感を引き起こす。

それはまた、きわめて倒錯的な快感でもあった。部下である二人が、上司である霧島の二穴処女を奪い、犯すという、それだけでも倒錯的である。その上、鳥海と大淀は、互いが互いを最愛の人だと思っており、その最愛の人のちんぼを、霧島の肉壁越しに感じるのだ。女には存在しない筈の、性器の存在を。それは二人を昂らせ、自分を見失わせるのに充分だった。

「ぐひっ♥ ぐひっ♥ ひぎっ♥ いひっ♥ ひっ♥ いひいっ♥ おちんぼっ♥ おちんぼおっ♥ おちんぼしゅごい、おちんっ、ぐひいっ！♥」

そこに、霧島の声が混じる。はしたないその声…最早豚の鳴き声としか形容しようのない無様な声は、快楽に蕩けた鳥海と大淀の脳髄を掻き回した。大淀も、鳥海も、もう、自分が気持ちよくなる事しか考えられなかった。霧島というダッチワイフを使って…その穴をほじって気持ちよくなる事しか、二人にはできなかった。

「ああ、ダメ…♥ ダメ、イっちゃう…♥ これ、イクって事なんですわね…♥ 射精って、こういう事なんですわね…♥ ダメ、止まらない…止められない…止めたく、ない…♥ ダメ、ダメ、ダメっ…♥」

もう、鳥海の絶頂は間近だった。ふと、霧島の向こうに大淀の顔が見える。大淀のその顔は、鳥海を責める時の、見慣れたサドの顔ではなかった。未知の快感に呑み込まれ、徐々に近付いてくる未知の…射精の快感に果てようとする、一匹のメスの表情だった。どうやら彼女も、限界が近いらしい。愛しい人

のそんな顔が、鳥海をより、昂らせる。

「あうっっ…♥ イきますっ、イきますっ…!♥ だめっ、精液、出しますっ♥ 霧島さんのおまんこの、なかにっ…!♥ イく、イく、イく、イく、イく、イく、イっ…ぐうっ!!♥♥」

ずん、と、鳥海が思い切り、霧島を突き上げる。ちんぼは根元までオナホ穴に呑み込まれ、亀頭が子宮口をハンマーのように叩き、しかし、子宮口はちゅうちゅと亀頭に吸い付く。その状態で、びゅうううう、と音が聞こえてきそうなほど、激しい射精が始まる。鳥海は、精通と同時に絶頂を迎え、尿道を精液が走る快感に、ただただ酔いしれていた。

おちんぼとは、こんなに気持ちいいものか。

射精とは、こんなに気持ちいいものか。

鳥海も、そして大淀も、ふたなりちんぼの虜になっていた。特に鳥海は、まるで霧島と瓜二つにすら見えるような、だらしのないアへ顔を晒して、イき狂っていた。

気持ちいい。

おちんぼ、気持ちいい。

大好きな大淀と一緒に、大好きな霧島の便器穴に射精するの、最高に気持ちいい。

放心状態でイき続ける三人—霧島に至っては、既に白目を剥いて気絶しかかっている一を、木曾は、くつくつと喉を鳴らしながら眺めていた。冷蔵庫から出したらしい日本酒をお猪口に注ぎ、三人の痴態を肴にあおる。

木曾は、ご機嫌だった。本当にご機嫌だった。心の底から三人の痴態を楽しみ、喜んでいて。録画しておくんだったな、とでも言わんばかりである。三人がもつれあって床へ崩れ落ちた時、彼女はもう一度、その酒をあおった。